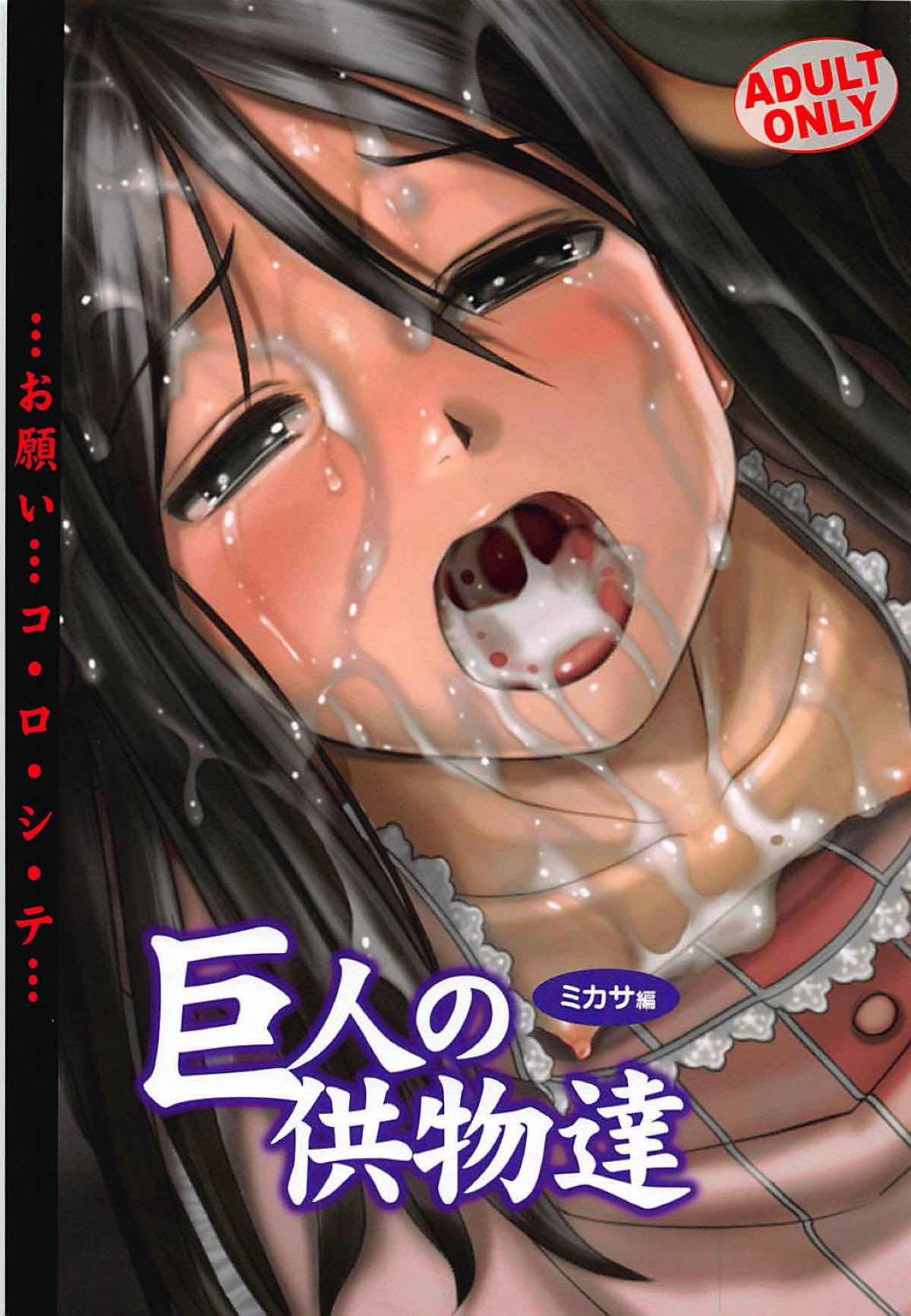

ADULT ONLY
…お願い…コ・ロ・シ・テ…
巨人の供物達
ミカサ編

ミカサ編

巨人の供物達

ピクルス

妖怪あんかけ

RPGCompany

【プロローグ】

午前、明るい日差しの中朝食を終えてミカサは母親から刺繍を教わりながら、父親と三人で団欒をしていた。

母は東洋人。父は白人。娘であるミカサは腰まである黒髪でまだ胸は膨らみかけだったが、顔立ちは母に似てあと5年もすれば街の噂になったであろう、美しい整った東洋系の顔立ちをしていた。猟師の父親曰く「俺に似てない」ということが自慢で、外にでる時は日焼けしないように帽子をかぶせ、服も娘らしく清楚な桜色のワンピースのフリルのスカートと、蝶よ花よと両親に愛されて育ったことが見て取れた。

一見幸せしか知らない彼女たちのようであるが、母親は世界で最期の東洋人である。

いつからなのか世界は【巨人】という人類の天敵が現れ、彼女以外の東洋人は巨人に食われて全滅した。

長い逃避行の末、高い壁に囲まれたこの地に落ち延び、ようやく根付き創りだした安住の地であった。

幸い、巨人がその高い壁を超える方法は無いようで、100年もの間、壁の中は楽園が続いているという。

ただし、この壁の外での人類の生存は見込まれておらず、この世界で最後の楽園なのかもしれないが、それでもこの明るい家庭は、その悲劇からようやく立ち直り、心の底から笑えるようになったのは、これまでの絶望の裏返しだったろう。

母親から東洋から伝わる伝統刺繍のレクチャーを受け終え、一息ついてミカサは不意に「子供はどうやってできるの?」と聞いた。

いつか来るであろう問いがとうとう来たと逃げようとする父に、母親は「お父さんに聞いて」と笑い、父親は「もうじきイェーガー先生が診療に来る頃だから先生に聞こう」とお茶を濁した時。

ノックがあった。

父親は返事をして――

――絶対開けてはならないドアをあけることになる。

ドアを開けるとすぐに「ドスッ」という異音の後、父が崩れ落ちた。

倒れた父の体を意に介さず3人の男がズカズカと家に入る。

「‥‥お父さん?」

ピクリとも動かない父の体。その下に血溜まりが広がっていく。

呆然とするミカサだったが、母の反応は早かった。

――「ミカサ!逃げなさい」

侵入者とミカサの間に割って入り、侵入者の武器に手をかけ奪おうとする。

だがミカサは何が起こったかわからず、倒れた父に視線は釘付けられていた。

だが次の瞬間、斧が母親の首筋に突き刺さり血しぶきが上がった。

「逃げて・・・・」

その言葉を最期に母も倒れ動かなくなった。その倒れた母親かも床板に血だまりが広がっていく。父と母の2つの血だまりを見ながらそのままミカサも意識を失った。――――――

――――――目覚めた時、ミカサの両腕は後ろ手に縛られ、家のベッドに寝かされていた。

身を起こすと倒れた母親の上に男がいた。

男は母親のスカートをたくし上げて顕になった白い足の間に身を割りこませようとしていた。

ゾッと背筋が寒くなり、その者が殺人鬼であることを躊躇せず警告した。

「お母さんに・・・・何を・・・・しているの？　変なことしないで！」

その声に男が反応した。

「お母さんに変なことをしないでって？　その変なことをしてお前が産まれたんだろ」

とゲラゲラと笑う。

「いいかいお嬢ちゃん、子供ってのは男がチンチンを女の股ぐらに突き刺すと生まれるのさ。今から見せてやるからな」

痩せた長身の中年男がそう言ってカチャカチャとベルトを外しズボンを脱ごうとする。

その時、ドスの利いた声がした。「いいかげんにしろってんだよ、バカヤロウが！」

声の主は小太りの中年で頭の髪は薄くニット帽をかぶっており、椅子に座って酒を飲んでいた。

その声に痩せた男は「へいへい、わかったよ」と掴んでいた母親の足を下ろす

「お願いです・・・・お母さんから離れて！」

懇願と強制、悲しみと怒りが入り混じった調子でミカサは叫んだ。

「いいぜぇ、代わりにお前がしてくれるかい？」、

「なんでもします・・・・だから」

恐怖で震えるミカサには何が起こっているかわからなかったが、母へ行われようとしている行為は、命がけで止めなければならない忌むべき行為だと直感していた。

痩せた中年男は、無精髭をいじりながら、両腕を後ろ手に縛られたミカサの前迄来るとズボンのボタンを外す。すると待ちきれないように男根が弾き出た。ソレはミカサの腕ほども有る肉の杭で、すえた臭いをまとい使い込んで赤黒く焼けた男根。それを男は口に含むように指示する。

ミカサは目の前で両親を惨殺されたショックで、何が起こっているのか理解できないほどに自失しており、白昼夢を見ているようだった。ミカサの整った顔立ちと対比して眼前に突き出された陰茎は、血管が醜く浮き出て醜悪な造形を醸しだしており、その先にミカサの拳ほども有る亀頭が湯気を立たせ、先端からはすでに待ちきれぬ生臭い雫を涌き立たせていた。ミカサはそれが何かさえ認識できないまま言われるがまま、おずおずと口を開く。

仮にミカサが意識がはっきりしていたとしても、勃起した硬くそそり立つ男根を見たことがない彼女にはそれが何かわからなかったであろう。

ミカサの小さな桜色の唇をピクンピクンッと脈動する亀頭で撫でる。そうして彼女の唇の柔らかなかな感触を楽しみながら、舌で舐めるように命令した。ミカサは夢遊病のようにその指示に従い亀頭の先に舌を這わした。

ピチャピチャ・・・・

先走りの生臭い液体が舐め取る度に涌き出す先端を、ただ言われるがまま舐めとった。

だが意識が朦朧としているミカサの舌の動きはあまりにも緩慢で、男の要求を満たすには全くおぼつかなかった。

【1】

「ケッ・・・ダメだ。くすぐったいだけだぜ」

ハーフの美しく整った顔立ちの娘に醜悪な陰茎をなめ取らせながらそう毒づくと、業を煮やして両手で顎を押さえて手前に彼女の顔を引き寄せ、健気に舐めるその喉に陰茎を突き込んだ。

「ゲボッ」

一気に喉奥まで突き入れられ、えづく。だが男はミカサが離れることを許さない。それどころかさらに吐き気で躍動するミカサの喉の痙攣に合わせるようにさらに深く挿入させる。

「オブォ・・・オッ・・・コホッ」

口に収められないはずの長さのペニスはなんと根本まで突き刺さる。ペニスの先端は食道の中、実にミカサの喉の半分近くにまで深く挿入されたが、それに男は満足する事無く更に男の腰を回してグリグリと捻るように回転させる。

男は望む感触をようやく得た喜びで「アッたけぇ」と感嘆すると、そのまま前後に無慈悲に腰を打ち付けた。

「ゲッポ……ゴッポ……ゴェッ……えボッォッォッ……オォッ……ォッ……ォッ……おッ……ォッ……ォッ……ォブッ」

ミカサの躰から胃液混じりの吐瀉物がたまらず込み上げるが、そのゲル状の吐瀉物は続けざまに突き入れられるペニスで押し返される。だがペニスが喉から引き出される時にまた込上がり、その連続往還で吐瀉物は食道の中を男の動きに合わせて上下した。それを潤滑油にさらにストロークを激しくし、

――ガッポ！　ガッポ！――

と人間から出るはずのない音を喉から鳴らせながら腰を打ち付ける。

後ろ手に縛られ顔を顎ごと押さえつけられたミカサは、何も出来ずにただ白い喉を犯され続ける。そしてついに吐瀉物は撹拌されてアブクとなり気道にまで入って、ミカサの鼻から吹き出した。

「ブフゥッ……ブッ……ゲホッ……ブフッ……ブフッブフッ！」

突きこむごとに鼻からゲル状の吐瀉物が吐き出され、呼吸できずに溺れてビクンビクンと断末魔のようにあがくミカサの頭を逃さぬように支えながら、なおも数十回ほど突き入れ蹂躙する間に、ミカサは酸欠で失神しかけた時、男は喜悦の表情を浮かべて濃い白濁した粘液を食道に注ぎ込む。そしてそのまま引き抜くと、残液をミカサの顔にまぶし振りかけた。

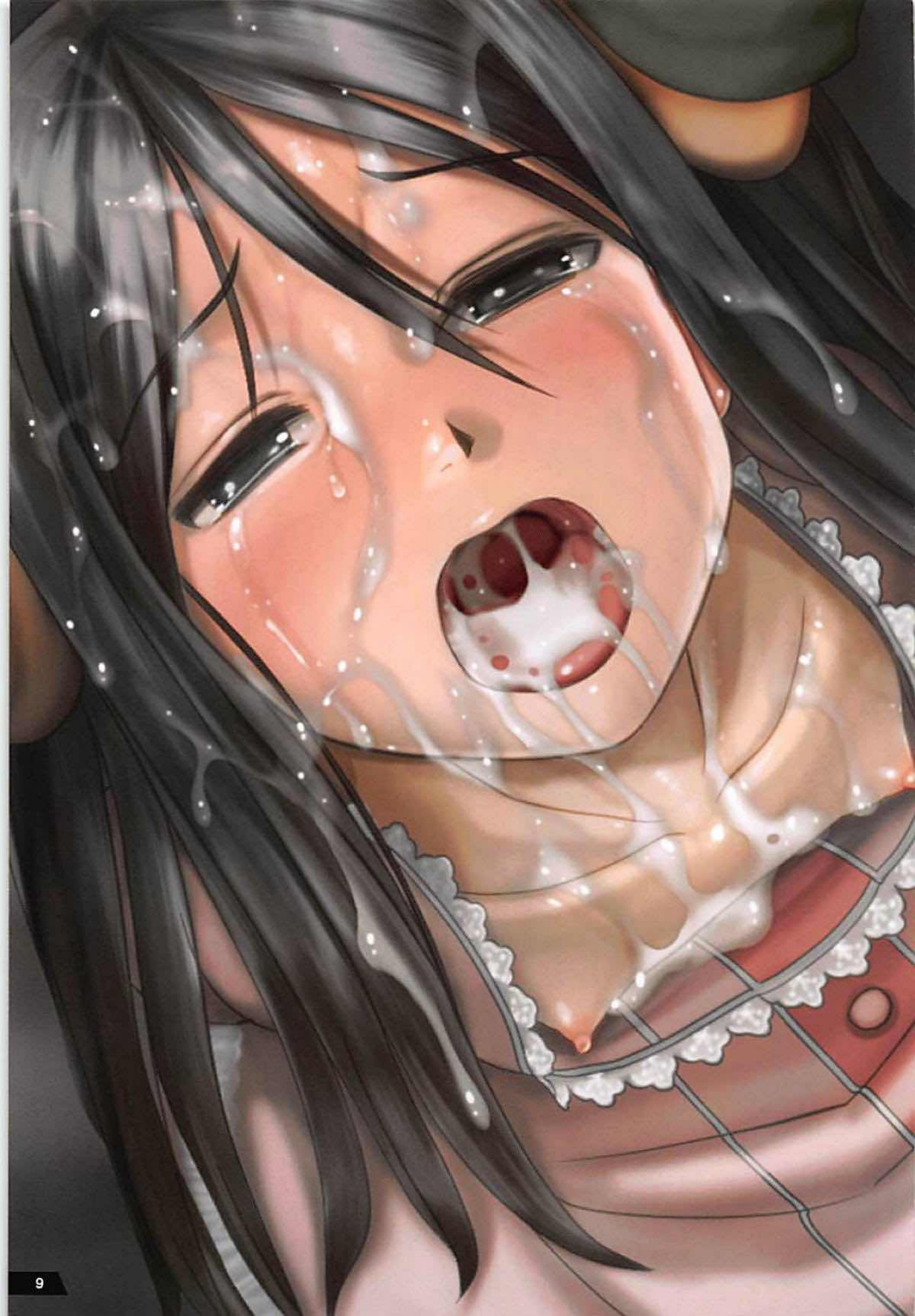
「ゴホッ……ゴホッッ！……　ゲェッホ！」

激しくえづくミカサだったが、男はそれに構わずミカサの両足の間に身を割りこませて股間を開かせると、ベージュ色の綿の下着が露わになる。恐怖で失禁して幾分重くなったそれを脱がしてミカサの腰を担ぎあげれば、透明感のある白磁器のようなスリットが露わになる。まだ完成してないゆえ花弁は柔らかな大陰唇の中に隠れているが陰核は通常よりもはるかに大きく見え、それはまだ膣口部分が育ちきっていないことを意味した。陰唇から少しアンモニア臭が立ち登り濡れている。その下に幾分濃く色素が沈着したアヌスが震えていた。

先程まで彼女の口腔を犯して唾液と吐瀉物が絡みついたペニス。それをミカサの小さな股間に近づけた時、見ていた中年の小太りの男が慌てて注意する。

「オイ！　わかってるだろうな、母親を殺っちまったからには、もうそいつしか残ってない。ハーフとはいえ最期の東洋の女なんだ。高く売れるから膜を破っちまったら罰金２０万出してもらうぜ」

「心配すんな。俺は元々後ろにしか興味ねぇよ」



そう言って陰裂の下に震えるすぼまりに、今しがた放出したところなれど、その時よりさらに充血して太さと硬度を増した陰茎を当てがった。ミカサは何が起きているのか理解が出来ないまま、赤黒い肉槍が股間に突き刺さろうとしているのを呆然と見つめていた。

排便のため為だけに生み出されたはずの小さなすぼまりを、々に押し開かれ、侵略されるアヌスの痛みにようやく状況を理解したミカサは悲鳴を上げる。

「ああっ……あああッ……い……痛ッ……やめッ……ングッ……ぐぅウッ」

必死に懇願混じりの悲鳴を上げて逃れようとしても両手を束縛され、両足を掴んでを開かされているではどうすることも出来ない。そして肉竿が深く埋没するごとにミカサの声は痛みで押し殺したくぐもった声になっていった。直腸壁が押し広げられるおぞましき感触と内臓を侵略される痛みに一言も発せなくなり、ミカサはくぐもった嗚咽を上げながら耐えるしかなかった。

容赦無く挿入を続ける男の陰茎はすぐに根本までに達した。ミカサのアヌスは限界にまで開き、悲鳴を上げミリミリと鳴る。まだ大人の半分ほどの太さしかないの腸の粘膜を纏った柔肉は、ペニス全体を強く包みあげてミカサが痛みで腰をよじらせるごとに内臓がうごめいて、陰茎を絞り上げる。

【2】

激しい収縮に男は思わず精を放ってしまいそうになるが、娘の括約筋が痛いほどに陰茎の根本を締めあげて出させない。この内部と菊門の締め付けの緩急のハーモニーは男を唸らせた。

「これはいい。フッ、こいつが尻で離さねぇで締め付けるもんだから、いつまででも楽しめそうだ」

痩せた男は感嘆しつつストロークを開始した。

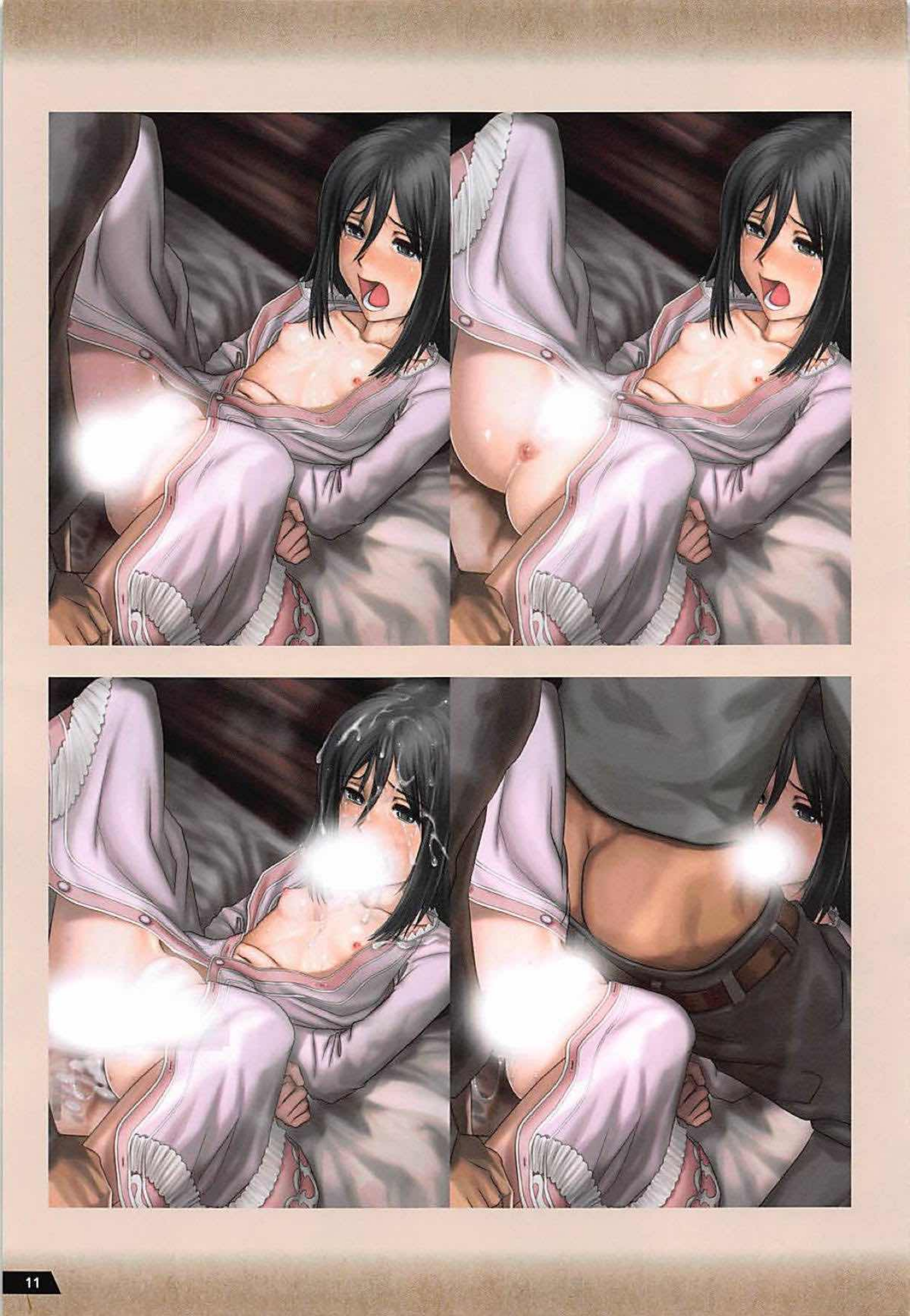
――パンッ――パンッ――パンッ――パンッ――

「アッ……アッ……アッ……ああッ――」

彼女にとって大人のペニスはあまりにも太く固い。本来大人が守るべき年頃の娘を、彼女の二倍もありそうな体格の男がよだれを垂らして喜悦の中犯す。その異常な状況と対照的にミカサの喉から悲鳴という名でありながら消え入りそうな小さな美しい音色が断続的に発せられる。その美しい声はどんな男も勃起させうるほど魅了する力を持っていたろう。事実その声に背の高い若い男も我慢ならずに、ズボンを下ろすと猛った肉棒をその美しい声を出す喉にねじ込む。

「――ゲゥウウッ!」

カエルが押しつぶされたような声を上げるミカサの喉奥に再び蹂躙が始まり、それに合わして男の下腹部とミカサの小さな尻が激しくぶつかって破裂音を鳴らす。



【3】

――パーンッ――パーンッ――パーンッ――

「オブッ……おッオッヲゴッ……オッオッ」

細喉とアヌスを上下から突かれて、ミカサは程なく呼吸困難のまま失神する。

ガクンと力を失ったことを知り、ミカサの首を前後に揺さぶって男は口腔に放った。合わせるようにアヌスに突き込んだ男も今までとは違ってた高速な動きで、いわばミカサとの性交ではなくミカサのアヌスを使った自慰のごとくに想いを遂げると直腸に大量の精液が放出する。

ドビュ――ドビュ――ドビュルルルルルッ――

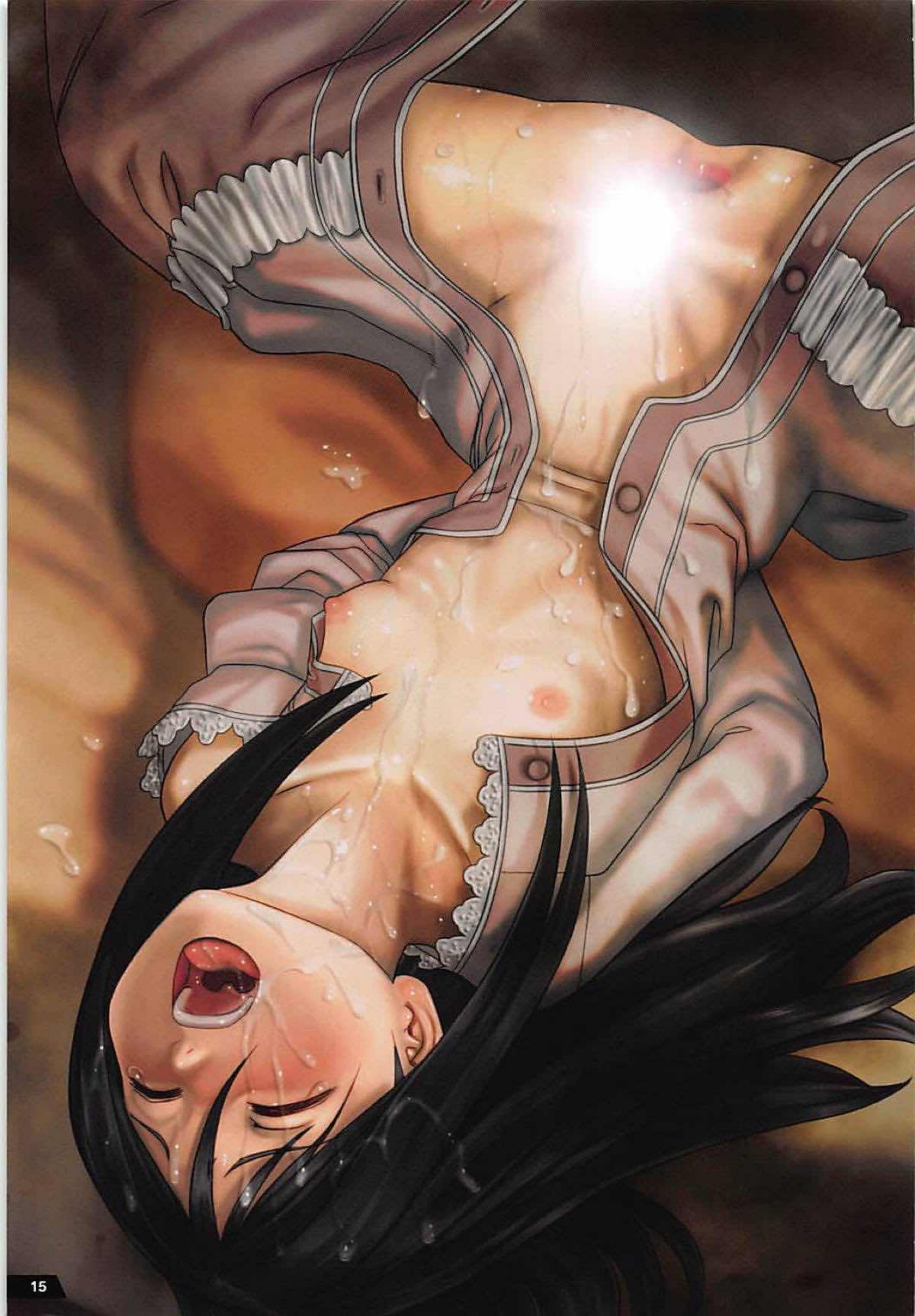
二人はミカサが息絶えたと思い、ぬくもりが残る間にと慌てて快感を放ったのである。事実アヌスは開ききって弛緩し閉じなかった。若い男は（やっちまったか）とバツが悪そうにミカサの口から陰茎を引き抜いた。その刹那、ミカサは大量の吐瀉物と共に精液を吐き出したあと、激しい咳き込みのあとヒューヒューと息を吸う。

巨人の供物達

男が想いを遂げるまでほぼ息ができないまま喉を犯され続けていたミカサは、ほとんど首を絞められていたのと同じで、死の淵から蘇生したのは偶然でしかなかった。

「馬鹿野郎……その娘が死んだらそれこそコイン1枚にもならねぇだろうが」

小太りの中年の男は注意するが、先程はああ言ったものの、どこか力がない。今では少ないハーフの東洋系とはいえ、胸もなく毛も生えていないでは、顧客は限られる。そもそも純血統の東洋系の大人の女をという注文だったからこの家を襲撃したのだ。別の血が混ざったこの娘はおそらく対象外だ。人身売買は見つかれば縛り首であるからそう簡単に別の買い手を見つけることができない。珍しいとはいえ東洋系を好む顧客がそれほどいるとは思えず、見つかるまでこの娘を飼育するのも手間が掛かり過ぎる。となると始末することになる可能性が高いだろう。中年男はもうどうにでもなれと戸棚から物色したワインを飲んだ。



【4】

昼過ぎになり、天気だった空は急速に陰り始めて今にも雨を落とし…待ってろ。今…そうとしている。

その中、男の激しい息遣いだけがアッカーマン家に響き続けていた。

ミカサは尻穴と喉を休みなく犯され続け、括約筋は閉じる間もなく蹂躙され続けて麻痺していた。

男たちはなにか白い粉のようなものを吸いながら、腰を振り続けて、尻穴は男が突き入れる度にブクブクと精液と腸液が撹拌されたアブクが吹き出す。そんな酸鼻な状況でミカサはベッドで力なく呆けたままで、首を横に一点を見つめていた。

リーダー格の小太りの男は

「…いつまでやってやがんだ！　雨が降る前にそろそろ戻るぞ！」

「まぁ待てよ、その前にこの娘に最後の別れをさせてやろうと思ってな。俺は優しいからよ」

サイゴ…別れ？

焦点が合いだしたミカサの視界に飛び込んだのは、それは倒れたまま動かない母だった。

ミカサは首を横に振る。「おかぁさん…おかぁさん…」

冷たく血溜まりに横たわる両親に呼ぶが、亡骸は応えを返さない。

「丁度いい…起きたか。だが…ちょっと…待ってろ。今…イキそう…だからよ」

汗をポタポタ落としながら男はミカサの上で動き続ける。

水っぽい音を立てながら、陰茎がアヌスを往還して、突き入れる度にアブクが飛ぶ。

ブリュッ…ブジュッ…ゴビュリュッ…ブリュッ…

何人の男に一体なにをどれだけ吐き出されたのか、ミカサの白い腹部は何らかの液体で満ちており、男が突き入れる度に内容物が流動してうねった。だが幸いなことに休みなく連続しての強姦で麻痺し、ミカサには下半身の感覚がなかった。

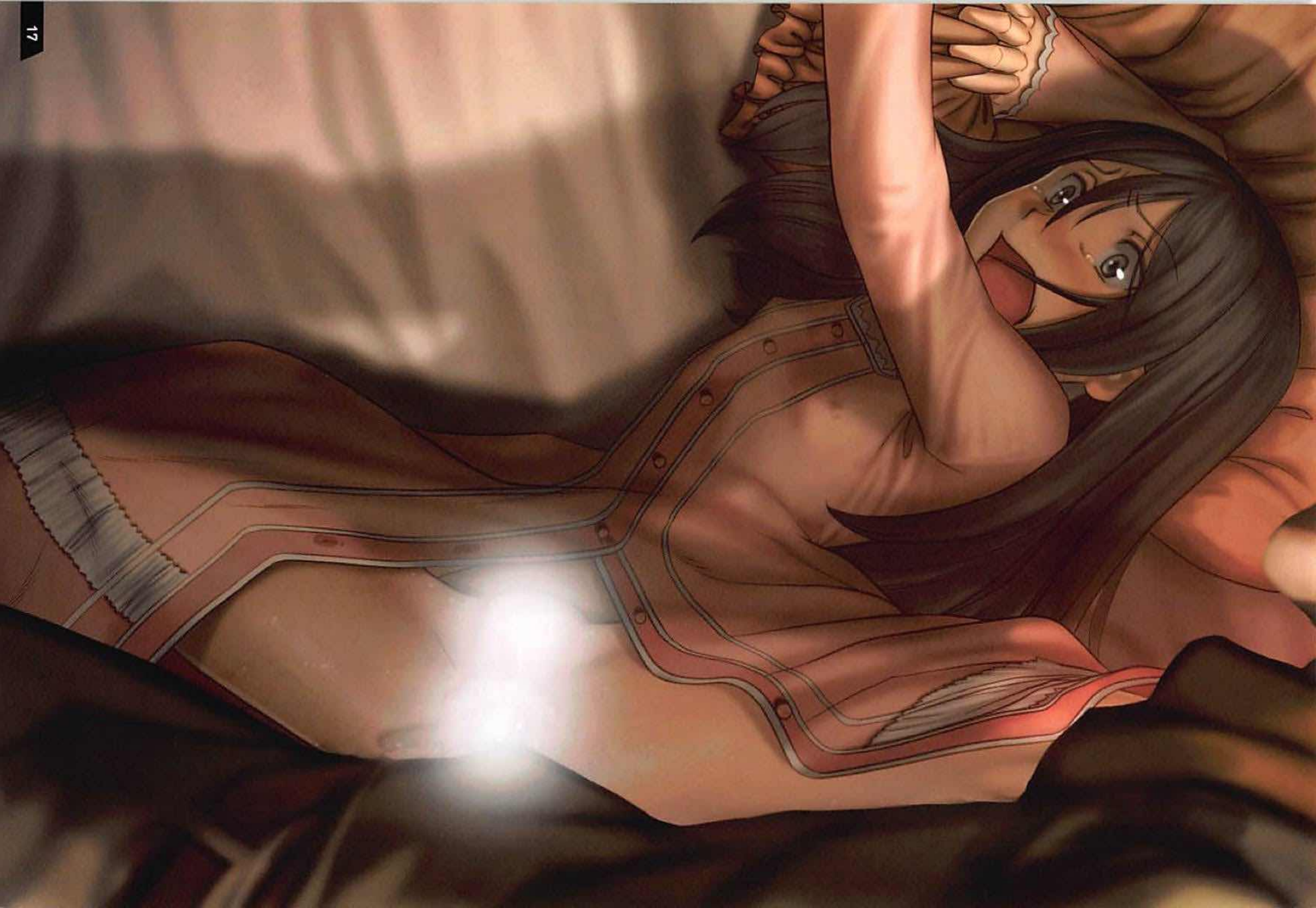
それ故、男のこの陵辱が悪いものであるという知覚がしづらく、必死に自分の上を動くこの行為が、なにか救護的なものと思えた。不思議なことに、この数時間余の記憶をミカサは失っていた。

――軽い記憶障害だった。

「おじさん…お願い…だから…ヒック…お母さんを、お母…… 今治せば…早く…おじさん…お願い」

「待ってろって言ったろうが…黙ってろ！」

高まりが近づいてきた男はミカサの頬を張り飛ばした。



「ハイ・・・ごめんな・・・さい」

大人しくすれば母を助けてくれる。そう誤解してミカサは黙って身を任せた。

(こんなことあるはずない・・・・・きっと何かの間違い。だからこの人は、お母さんとお父さんを助けるため。・・・きっと・・・そう・・・知ってる、私知ってる・・・グリシャ・イェーガー先生が言ってた。・・・ケッセイっていうお薬は人間から作るんだって。沢山の人が死んだ病気が流行った時に私も打ってもらった。みんなそれで助かったんだもの・・・そう、・・・その薬をきっと今作ってる・・・そうだ! 今日先生が来るはず。よかった・・・もう大丈夫。きっと・・・すぐに・・・元・・・通・・・り)

涙を落としながらミカサはグルグルとありえない言葉を繰り返し続けていた。思い出したくな過酷な事が起こると、自己防衛でその部分の記憶を失うことがある。正確に言えば記憶の扉が開かなくなるのに近い。記憶があるのにそれを見つけられないのだ。とはいえどこかそんなはずがないとわかっていた・・・だが、その希望に縋らねばならないほど、この現実は残酷すぎた。

「行・・・く・・・ぜ」

何のことかわからず、ミカサは目をつむって備えた。

どくッ――どくッ――どくッ――どくッ――

なにか熱い液体がミカサの下半身に注がれる。

――刹那、何時間もの間注がれつ続けたその温感はミカサに残酷な記憶を取り戻させた。

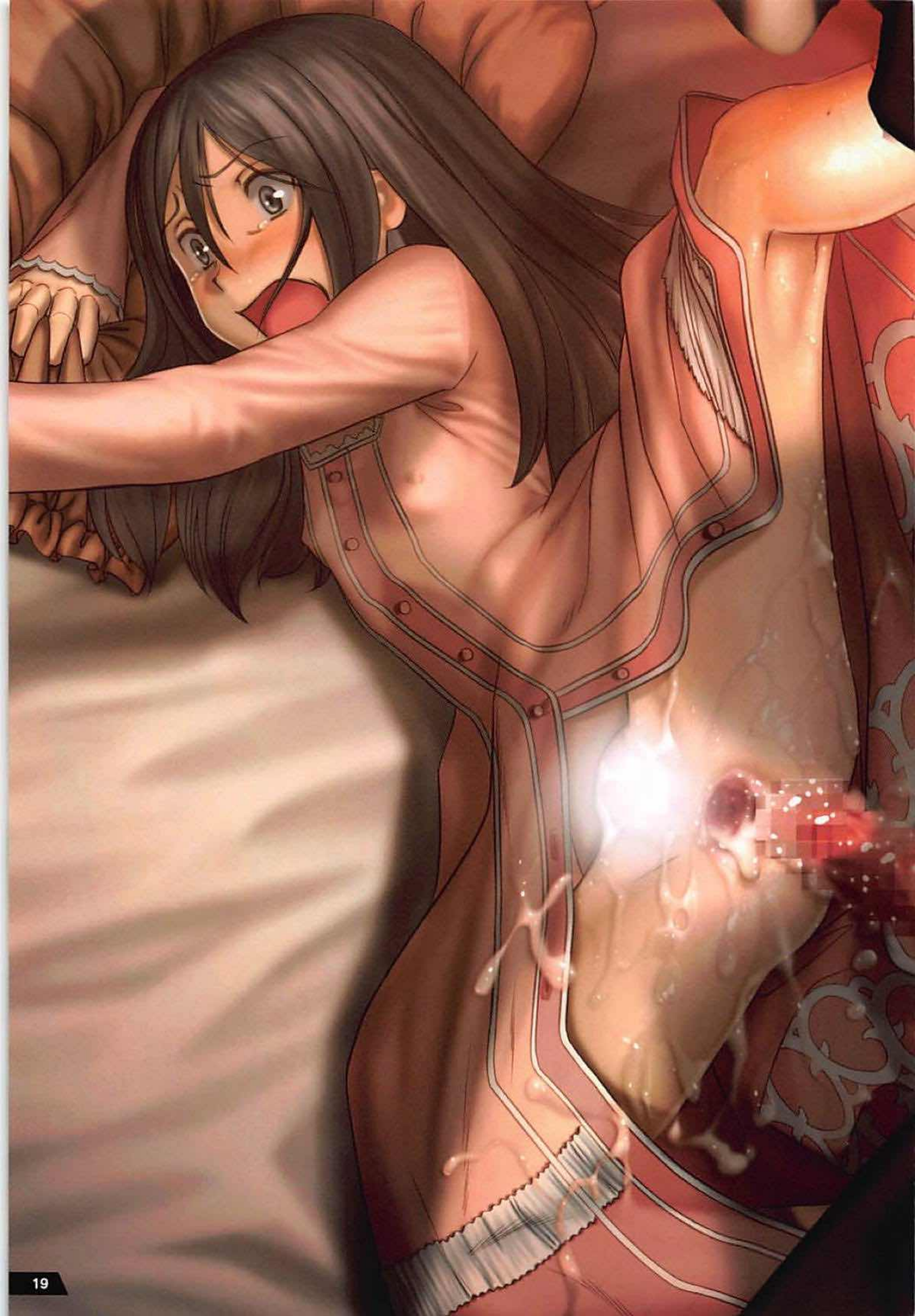
倒れた両親を全く顧みず、ずっと自分を弄び続けていたこと。そして何よりもこの男達が両親を殺したことを。

「人殺し!!・・・・離し・・・・て・・・・!・・・・誰・・・・か! 先生! イェーガー先生!」

暴れて離れようとするが、だが男の陰茎は薬の影響か全く萎えず、ミカサの下半身は男根による楔を打たれて身動きできなかった。さらに喜悦の迸りを放ち思いを遂げて、虚脱しセイウチのようにミカサにのしかかる大人の躰を押しのける事は彼女の細腕には出来なかった。

・・・それどころかそのミカサの動きが男のペニスに刺激を与え、かつ嗜虐的な思考をもたげさせる。

――それは残酷な思いつきだった。



「まぁ待ってな・・・俺は優しい男だからよ、最後の別れをさせてやるよ」

男は繋がったままミカサを抱えて座る。体重でさらに陰茎が深く刺さり、思考感覚を取り戻してしまったミカサに熱い痛みを与えた。

「うグッ」

「見えるか？　さぁお母さんにサヨナラをいいな。ククッ・・・もう逢えないから・・・よッ！」

そう言って、ミカサをまだ萎えぬ男根を軸に持ち上げると再び落とす。母親の遺体を見せつけながら座位の体位で男は往還を再開した。だが、その角度は今までと異なり、直腸越しにミカサの浅い下腹部当たりを狙って突いた。

――そこには膀胱があった。

ドブンッ！――――ドブンッ！――――ドブンッ！

効果はてきめんだった。激しい尿意がミカサを襲う。尻穴を激しくコソギあげられるだけでも排便の時に尿が漏れるのと同じ作用をもたらされる。その上、今まさに男根で膀胱を狙って刺し抜き続けられていたのである。

【5】

「・・・・！」

ミカサは声を上げることも出来ずに、必死に尿意をこらえるが、直腸と膣の肉で隔てられているとはいえ、あまりにも弱い内臓越しに、幹ほどの硬さが有る陰茎で内臓内部から殴打されては抵抗は無駄だった。

ストロークの度にチュッチュッと雫が漏れ、さらにトドメとばかりにミカサの躰を離さぬように抱きしめ、膀胱を押し潰すように男根で押し込まれれば尿意を押しとどめることは不可能だった。

「アッ！」

小さな悲鳴と同時に強制的な排尿がミカサの股間から放たれた。

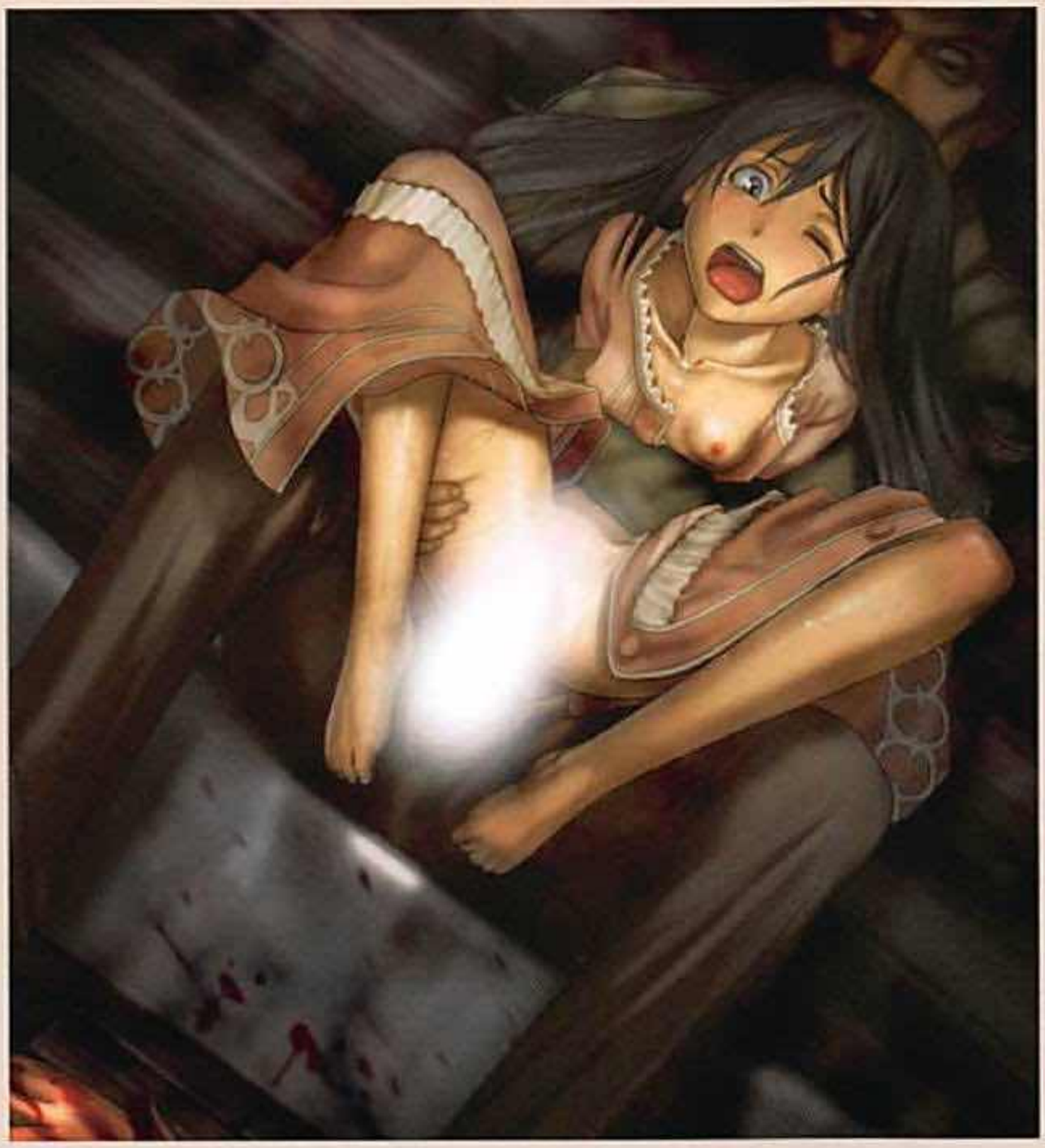
その放出が何を意味するのかわからないままミカサはその軌跡を見つめた。

シャァァァァァ・・・・

大きく弧を描いて飛ぶ小水が出ると男はなぜか動きを止め、そして男が笑いながら指差す。その先に視点を移すと

――ミカサから放たれた小水が、倒れた母の手元に降りかかっているのだ。――

巨人の供物達

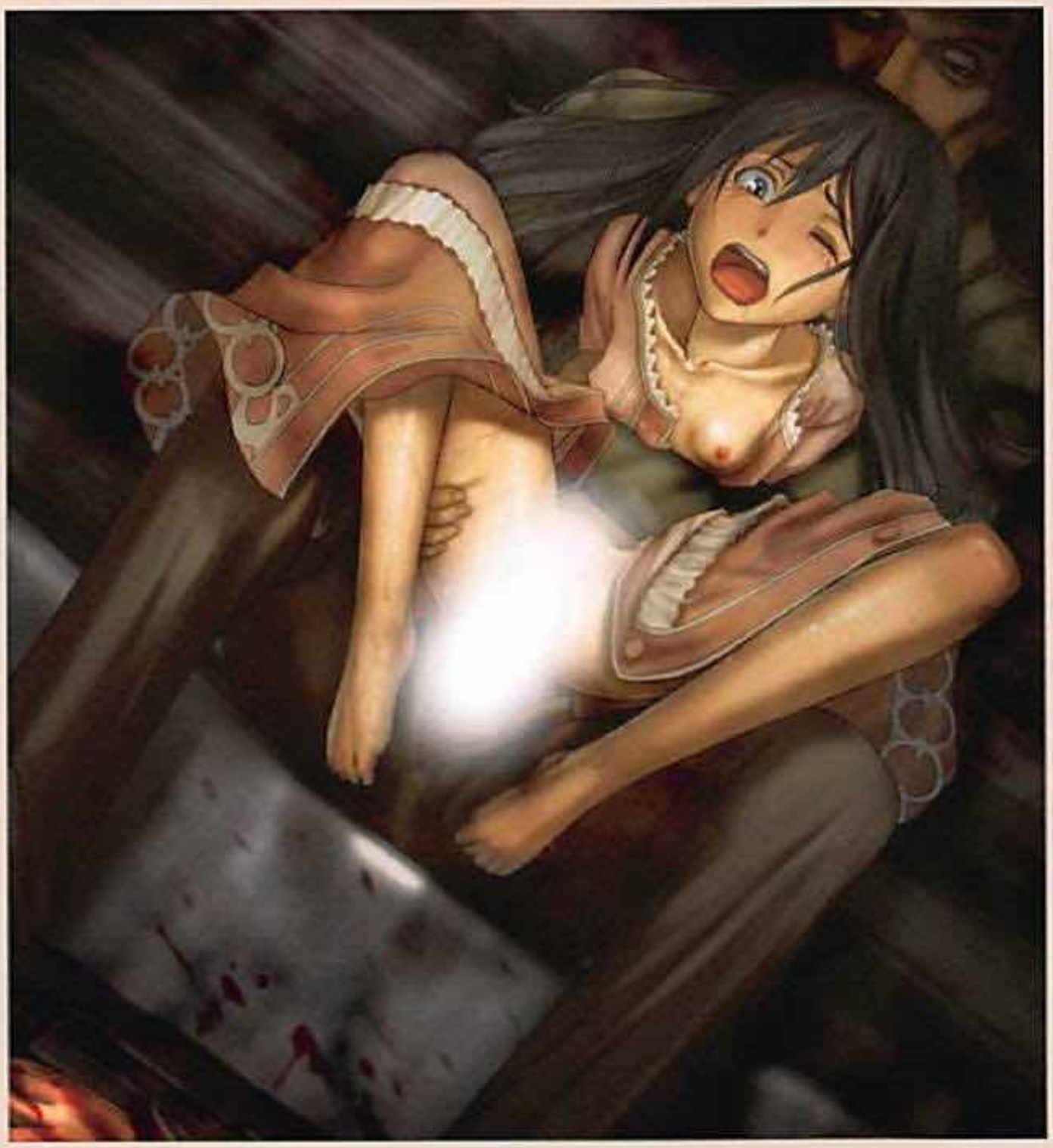


「イヤァァァァァァァァァ！」

必死に尿を止めようとするミカサに、再び男は腰を叩きつけるとその勢いで遠く飛び、小水は母の顔に体に降りかかっていた。ミカサが尿を止めようとすればするほど狭くなった尿道から押し出される。

ミカサの小水が母親の全身に降りかかっていった。

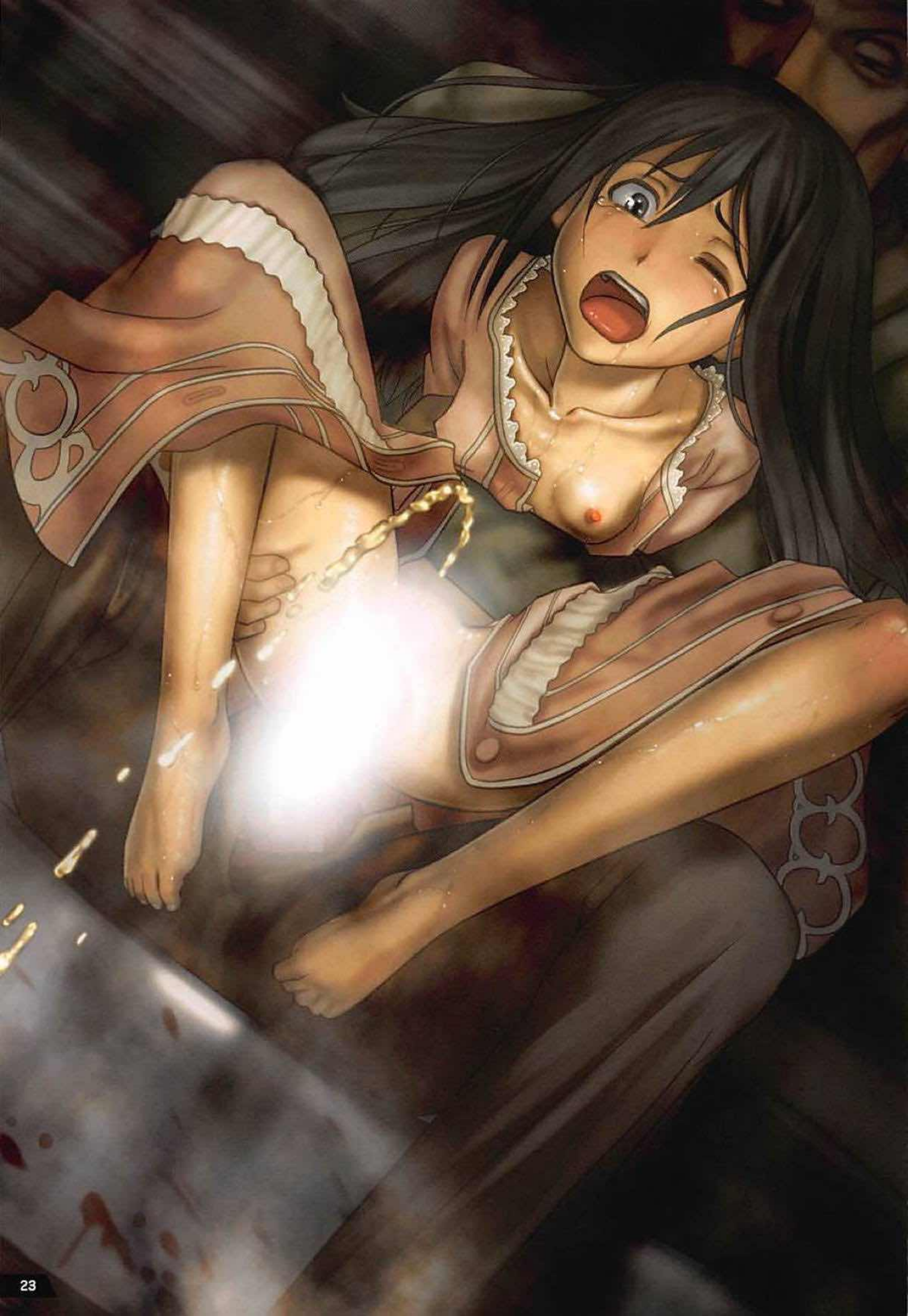
ミカサは半狂乱になりながら泣きじゃくった。



「やめて！　やめ……て……アアッ！……こんな……ひ……どい……ヤッァッ……」

ゲタゲタと男が笑い続ける。それが反響しながらグルグルと頭のなかを回る。

ミカサはそのまま放尿による筋肉の弛緩に誘われながら失神した。



【6】

――ミカサが再び気をとり戻した時、見知らぬ天井だった。雨音がシトシトと鳴り、気温は冷えていた。どこの家なのか記憶に無い。壁は漆喰の上に壁紙が張ってあるがところどころ破け、隅には蜘蛛の巣も張っている。長く使われていない部屋のようだった。家具は全くと言っていいほどなく、ホコリとカビ臭いベッドの上にミカサは寝かせられていた。

ギュルルルルルッッ

「痛ッ・・・」

――急速な便意がミカサを襲った。

便所はどこだろう？　立ち上がり裸足で板張りの床を歩く。ギッギッと床が鳴る。部屋にはドアとドアがない出入口がひとつ、窓もあった。そして火が付けられていない暖炉。どれも見知らぬ物。

――ツー

ポタと股間から糸を引いて白濁した雫が落ちた。散々に蹂躙されて腫れ上がったアヌスから漏れ出たものだった。

体や服は粘液で汚れたままで、男たちの体臭が染み付いており、ここに寝かされている理由はあの男たちに連れ去られたということだということが恐怖となって襲いかかった。

（逃げなきゃ・・・）

窓に手をかけ開けようとするが、立て付けが悪いのか彼女の力では開けることが出来なかった。

――だがその時背後から声が掛かる――

「逃げようとするんじゃねぇよ」

「・・・ヒッ」

小さく悲鳴を上げて、後ろを振り向くと若い長身の男が立っていた。

「ち・違います・・・トイレに」

「便所でなんで窓開けようとしてんだ！　ふざけんじゃねぇぞ！」

バン！

平手打ちされ意識が飛ぶ。躰中に染み込まされた恐怖で思わず言葉に出してしまう。

「ゴメンなさい」

娘の小さな脱出劇は鎮圧されて終わった。

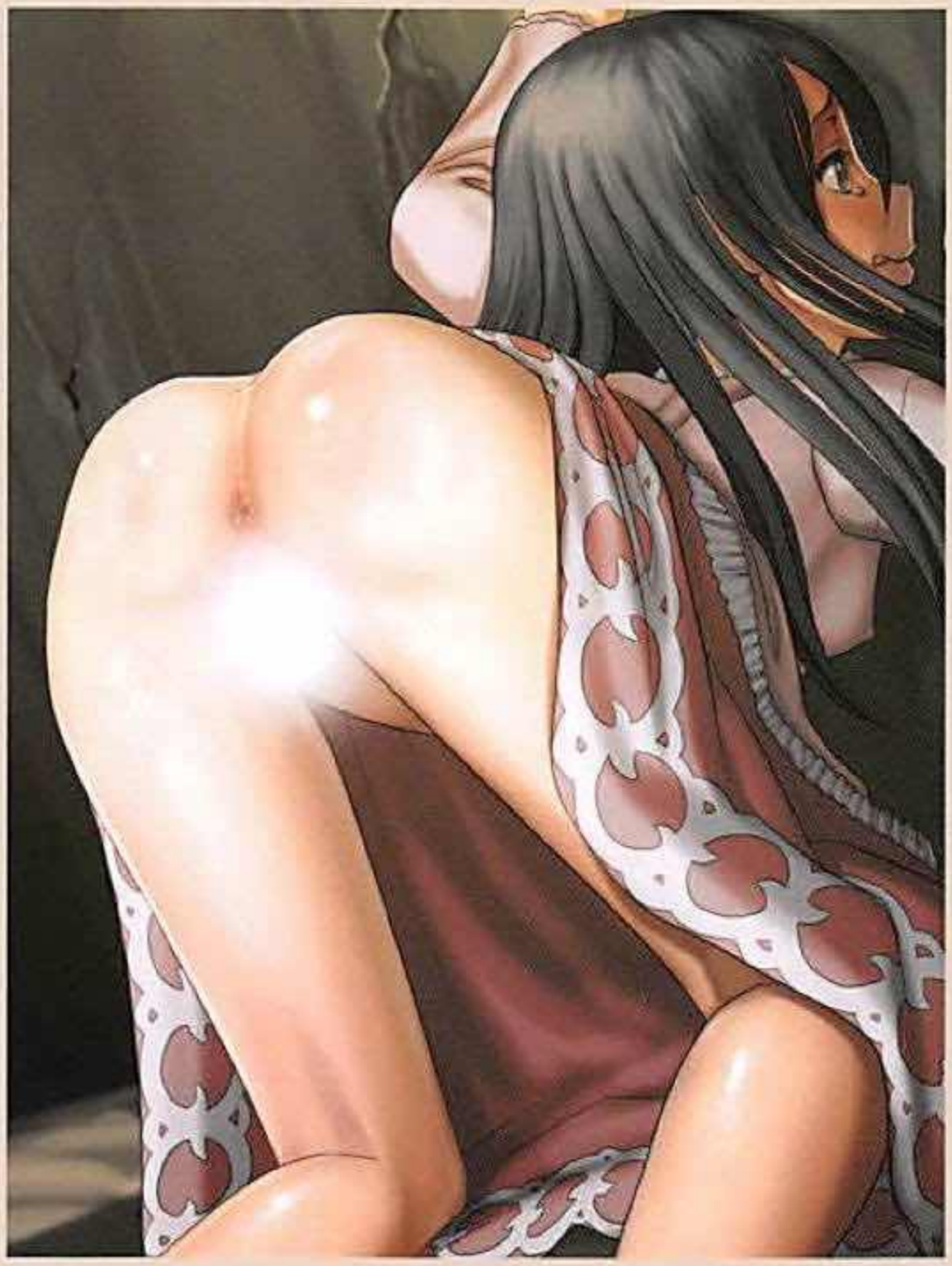
ミカサの手首を取るとベッドの上に連れ戻した。

「おら、尻を出せ」

震え竦み切って言われるがまま壁に手をつき尻を上げるミカサに、前戯もないままですでにコチコチに硬くなった肉棒をアヌスにあてがった。その後何が行われるか、ミカサにはわかっていた。腕に力を込め蹂躙に備える。

こうしなければ体格差で押しつぶされてしまうのだ。

「そうそう。そうやって大人しく俺達の性処理便所になるなら、生かしておいてやるよ」



——ズルルン——

恐ろしい言葉とともに挿入された。

「アグッ！」

腹部に15センチほどのペニスが打ち込まれて、その体積分便意の基であった内容物が一気に押し返されて腸の中を駆け巡る。

——ギュルルルル——ゴロゴロゴロゴロ・・・・

脂汗を垂らしながら刺すような腹痛に耐える。
「お？　便所に行きたいってのは本当だったようだな」
陰茎の先に柔らかな感触があるのを感じた男は嫌がる素振りもなく、そのまま往還を続ける。
――パンッ――――パンッ――――パンッ――――パンッ――
柔らかなミカサの真っ白な尻肉は陰茎ごと男の体が叩きつけられる毎、乾いた破裂音とともに赤く充血していく。
それと共に、ミカサは腹部を駆け巡る腹痛を伴う蹂躙に必死に耐えていた。
突き入れられれば、腹部の内容物が全て押され、抜かれるときにポンプのように吸い上げられる。
腸の内容物が全て動きまわるのだ
「アアアッ・・・・あッあァあぁっ！・・・・や・・・・あっ・・・・あああッ！」
それは数メートルにもなる蛇状の陰茎に侵されているのと同義だった。
――ガリガリッ――
壁に手を当てていたミカサの細指の爪先が漆喰を引っ掻いて、爪痕を残す
ミカサの苦痛は腸の大きな蠕動となり、そのウネリは柔らかな腸の内壁が男の陰茎を撫でるがごとく擦り続けて侵略者に例えようもない快感をもたらせた。
「おおイイな・・・・最高だ・・・・お前はいいモノ持ってる」
男はミカサの頭を撫でて褒めた。
頭を撫でられ、ミカサはビクッとすくんだ。恐怖の連続の中で褒められるとそこに人は縋ってしまう。愛情を伴う場合は躾だが、この征服者と虜との関係の中では洗脳である。それをミカサは敏感に感じ取っていた。だがそれでもこれを続けていればそれ以上ひどいことをされないという媚びさえ自覚してしまう事実が絶望を決定的なものに変えた。その死に至る病に飲まれる恐怖から逃れるように、ミカサは泣きながら嬌声を上げ続けた。
だがそれは男の耳には心地よい嗜虐を昂めるものでしかなく、絶叫に合わせてペニスの硬度は増し、血流がより膨らみ血管が膨れ上がってより凶悪なものへと変化した。ゴツゴツした樹木の皮でアヌスを擦り上げられるようで、
――ゴリュゴリュゴリュッ――
と激しい振動が内臓を震わせてミカサを襲った。
「ウあッ・・・・あッ――――あッ・・・・あッ・・・・あッ・・・・あッ・・・・ッあッ・・・・あッ」

その振動で痛みが麻痺していき、代わりに甘い性の喜びと思える痺れがミカサを包んでいく。それは痛さを麻痺させようとする脳内物質もあり、また腸越しに膣を刺激され、また陰嚢でミカサの陰唇を叩かれる様々な刺激などのどれが起因したのかわからない。だが痛みと喜悦が同時に起これば人は喜悦に縋ってしまう。それは痛みは麻痺するが、快感は麻痺しない為だけでなくて痛みを感じたくないために、生存本能として快感に敏感になる快感が痛みを消し、痛みが快感を求めさせる。その螺旋がミカサから急速に痛みを失わせ、かわりに全身をゆっくり開花させていく。

全身の肌は高揚して赤みがさし乳頭も敏感に震える、快感の神経が研ぎ澄まされた頂きを衣服が、男の肌が擦れて刺激する。

「アハッ……あうッ……あッあッハッ……はうッ……あッ」

熱く上気し、声が吐息まじりの声へと変化していることを、まだ大人の始りにさえ差し掛かっていない彼女には知る由もなかった。

――キュウッキュッ――

とその振動に応えるようにアヌスは細動して陰茎の根本を刺激し、男はよだれを落としながら遮二無二熱い男根を叩き込む。

男根による激しいアヌスへの殴打毎に、ミカサの白い陰唇は熱を帯び、蕾がほころぶように花弁をのぞかせた。

肉芯も芽を出し、その頂に男の柔らかな陰嚢がたたきつけられ、その優しい刺激がさらにミカサを開花させる。
愛液と言えぬほどではあるが股間が湿り、そこに陰嚢がたたきつけられて糸を引く。
外の雨音は強くなり急速に気温は冷えるが、それに反して屋内は熱気でいっしか窓ガラスは曇りはじめていた。
「ソラッ締めな！」
バァアアアアンッ
嬲られ続けて弛緩しかけていたミカサの尻に男の張り手が飛び、その焼けつくような痛さで、アヌスが絞り込むようにキューっと閉まる。
陰茎の根本が締められて男はその刺激で、その締りを押し返すように一気に精液を放出した。
――ドビュビュビュッ――
「あ・・・おッ・・・ぐゥんッ」
腹部に熱いあの粘液が注ぎ込まれたのがわかる。
それは撹拌された腸の内容物と融け合い染み込み一体となった。
ズルッ・・・
思いを遂げた力をなくした陰茎が引きぬかれ、栓を失ったアヌスから内容物が破裂音と共に一気に吹き出す。
「あ・・・あああ・・・あッ」
それの殆どは男たちの排泄物だった。
腸の中で散々に撹拌された3人の男の大量の精液と尿。その混合物がまず排泄され、それを皮切りに精液をまとった軟便が続いて放出されていった。
激しい性交で括約筋は痙攣し止めようがなかった。だがミカサは、それでも必死に止めようとする。
皮肉にもそれが排泄の門を狭め、細く長く続くことになる。ミカサは打ちひしがれて竦み上がりながら排泄を続けた。
しかし長身の男はその茶色い便を流し続ける白い尻を優しく撫でた。
男にとってそれは気まぐれであったのだろう。だがその愛撫はミカサに許しを与えるものだった。
「・・・ア・・・」
親を惨殺した仇に汚され、それに抗えず、ベッドの上で大便を排泄することは、取り返せないほどの罪と感じていた。
それを撫でられて許されることに縋ってしまう自らの心の弱さがミカサの心根を砕いた。
その後、一体どういう心づもりなのか、排泄物は男たちが掃除して処理した。

ミカサは腰が抜けて立つことさえ出来ない中、単に処理を早くしてミカサを抱きたいだけであったろうが、本来自分がしてしまった粗相は自らが行わなければならないと考えるミカサに、それさえも処理されるということは理不尽ではあるが恩義のようにミカサは感じてしまっていた。

別の世では「ストックホルム症候群」と呼ばれるそれは、閉鎖空間で非日常的状況を続けられると、その制服者に共感を感じてしまう。人間の恐怖と生存本能から生み出されるそれは自己欺瞞で、洗脳の始まりでもあった。両親を殺され、全身を汚され憔悴しきったミカサにこの小さなことが、生きる上の蜘蛛の糸で縋らざるを得なかったのである。

そのあと男が前をはだけて陰茎を眼前に出されると、ミカサは言われるがままに奉仕する。以前のように殆ど自失状態で奉仕するのではなく、指示を正確に理解してその通りに亀頭を愛撫した。命令以上にしてしまう事は彼女自身にも理解できないことだった。その咀嚼できない感情と本能との差異が、肉体に誤作動を起こさせる。瞳から涙を途切れさせることはなかった。

「ククク・・・・そうだ、もっと丹念に裏筋をなめな、う・・・・そうだ・・・・うまいぞ」

チュッチュッ

言われるがまま舐め続ける後ろで、別の男が尻を丹念になで、ビクッビクッ　と反応する様を楽しんでいた。
我慢しながら排泄をし続けた為括約筋は疲れきって、痙攣し半開きとなって小刻みに開閉して震えていた。
そこに指で突かれると、イソギンチャクのように指をアヌスが飲み込み震える。
そうしてひとしきり弄んだあと、アヌスに亀頭をあてがう。

ミカサは力を抜いてそれに備える。それに気が付き男は

「好き者が・・・・こいつ待ってやがるぜ?」

【 7 】

とひとしきり言葉責をするがミカサはじっとその体制を崩さずにいた。
力を抜いているためアヌスから先ほど入れられたばかりのスペルマが垂れる。
それはまるでお預けをされた子犬がよだれを垂らすかのようだった。

「そんなに欲しければくれてやる」
ミカサの腕ほども有る陰茎を一気に挿入する。

「ハウッ」

ミカサは瞬時に全身を緊張させ、その男根を内臓で向かい入れ。
腸の蠕動が始まった。
尻穴に根本まで差し入れたペニスにヒュクヒュクと絡みつく腸壁は、蠕動でペニスに絡みついて撫でる。
嗜虐者はそれを楽しみながらゆっくりゆっくり、挿入時の何十倍もの時間をかけて引き抜いた。

ずぶずぶずぶブブブブ・・・・

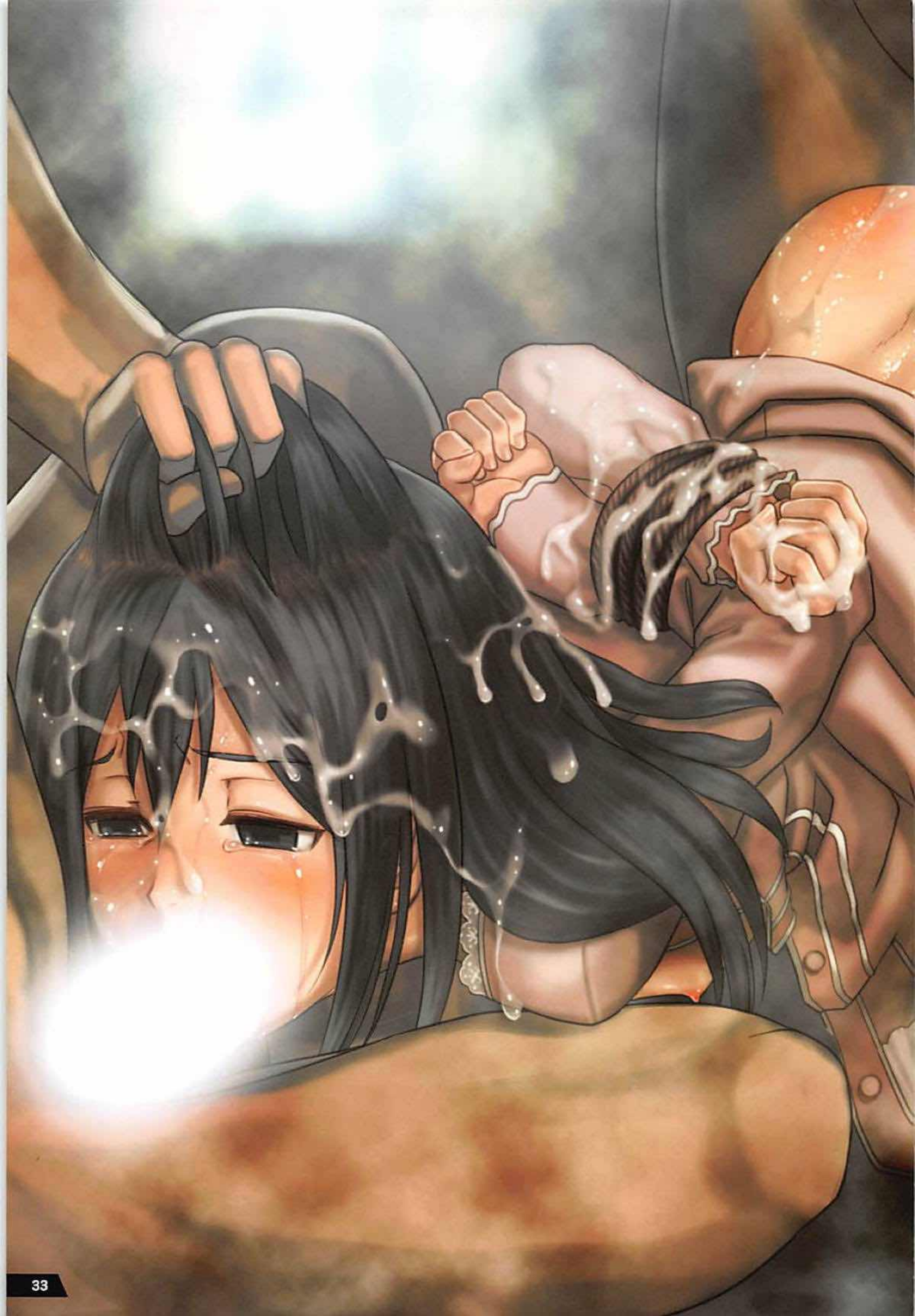
さっきまでの排泄が蘇り必死に括約筋を締めてしまう。
条件反射と生物の本能で肛姦に排泄という快感を感じ取ってしまって、ビクビクとミカサは喜悦の反応をしながら、その排泄感に耐え続けても、亀頭のカリの引っ掛かりで再び直腸奥に突きこまれる。そして引き抜かれるという無限排泄地獄にミカサは悶えながら喘ぐ他はなかった。

アヌスを責められたことで口の奉仕が全く無くなったため、口淫を命じていた男はそれを諦め、直接動くことにした。
ただ喘ぐだけになってしまったミカサの口に指を入れて開けさせたあと喉奥に男根を突き入れる。

「ゲブッ」

前後から突きこまれて、ミカサの躰は持ち上げられ、一本の肉棒で串刺しされているかのようであった。
前後から激しい動きにミカサは逃れることが出来ないまま翻弄されられた。
大波に浮かぶ小舟のように、背骨はたわみ、胸郭は悲鳴を上げ、腰は折れんばかりに限界まで曲げさせられる。
自由度が有る未完成な骨格だからこそそれは可能であった。いや男たちはそれを百も承知で、未完成ゆえの限界を利用しての様々な体位をさせ続けた。

翻弄され。もう尻穴を閉めることさえ忘れて、ミカサは入れられたばかりのスペルマを吹き出し、また別の男がアヌスを攻める。
冷たい雨が降りしきる中、部屋には宴でもうもうと湯気立ち、窓は真っ白に曇って水滴を流していた。



【 8 】

――ベッドに腰掛けたリーダー格である小太りの男が酒を飲みながら、その横に輪姦で憔悴しきったミカサの頭を撫ぜていた。そして意を決しこう言った。

「おお、いい事考えついた。こいつを売る前にこの娘に孕ませりゃいい。そうすれば何十人でも作れる。クォーターになるが、数を売ればいいだろ。なぁに客が少ない純粋な東洋系よりはクォーターくらいのほうがミスティックで数が履ける。……その相手は誰がいいか……おおそうだ、俺の髪は黒いから、まだ東洋系に近い子が生まれるぞ！　なぁ、そうは思わんか？」

背の高い若い男と、痩せた中年の男は顔を見合わせた。

「よく言うぜ単に自分が処女を散らしたくなってきただけだろうが？」

「つべこべ言うな。異論は有るか？」

二人は両手を軽く持ち上げ首を横に振った。

「フン！　そうと決まれば子種を注ぎ込んでやるか。お前たちと違って俺はこの娘の将来を考えてるんだ。始末するより人道的だろうが」

「へいへい　優しくなったもんだな。そうそう、お前の娘って丁度このくらいじゃなかった？　そういや髪も長くしてたっけ」

「……なにがいいたい？」

「クックックッいや……お前ら父娘に幸あれと思ってな。この東洋系の娘のお陰で、お前が実の娘に手を出さずにすむなら、せいぜい大事にしようぜ」

小太りの男はバツが悪そうに、だがニヤリと笑うとベッドの上のミカサの両足を開かせた。

指先で柔らかなスリットを開くと合わせて薄い花弁が開き、中央のベビーピンクに色づく秘密の孔が小さくあった。

小太りの男はアヌスをグリグリと人差し指でかき回し、誰のものともしれぬスペルマ混じりの腸液を二本の指で掻き出すとミカサの処女孔に塗りたくった。

それが潤滑油なのだろう。前戯もなしに、彼女にとっての巨人というべき巨体の大人の身体が、肉茎を支点にして覆いかぶさる。柔らかな陰唇に、赤黒く焼けた肉茎が突き刺さっていく。

ズブズブ……

その侵食にミカサは覚醒して悲鳴を上げた。

「イヤァッ！」

その悲鳴にたじろぎもしないまま容易く処女孔を引き裂くと狭く細い膣を押し広げながら滑りこんでいく。

男の陰茎の半分も突き刺さったところで膣奥の子宮口に突き当たる。この男の陰茎は人並であるがミカサのまだ完成途中の膣と比べてまさしく巨人であり、膣のどこが傷ついたのか破瓜の血が溢れて下半身を濡らす。

その血ノリを新たな潤滑油として男は下半身を叩きつけ始めた。

「アッ・・・・オッ・・・・ォッ・・・・アッ・・・・ヒッ」

横隔膜ごと胃を突き上げられて、強制的に発せられるオットセイのような悲鳴が断続的に響いた。

そんな中、ミカサの躰には急速な変化が起きていた。危機的状況が躰に起きた時痛みや苦痛を和らげようとする脳が快楽物質をこれまで以上に生成し、ミカサは痛みは殆ど感じずただ浮遊感だけがあった。さら膣への直接の挿入はミカサの脳は皮肉にも正常なる性交と誤解し、躰が受け入れ体制を取り始める。胸の膨らみの頂点の尖りはツンとしこり破瓜で血まみれの小さな花弁も開花し充血する。そしてその上部の肉芽もムクリと起き上がり包皮の外に顔を出した。

男はその反応を目ざとく見つけ、指でその陰核をさすり摘んだ。

「ッ・・・・」

体外に露出された神経の芽を直接擦られてミカサは痛みと恐怖で眉を潜めた

だがそのあとそれ中心に甘い痺れが全身に漣のように広がる。

脳が一度そう知覚すると、胃液や唾液が勝手に流れるように、破瓜されたばかりの処女孔の膣壁の粘膜が多くの蜜を溢れさせる。

頬が上気し全身の皮膚に赤みが刺した。

血とは全く異なる分泌液が流れたことは、ヌルリと滑りが格段に良くなったことですぐに分かった。

「ヌルヌルになって喜んでいるな・・・・そんなにいいのなら毎日してやるぞ、喜ばせてやる」

そんな男の欺瞞の言葉はミカサの耳には届いていなかった。

ドーパミンの影響で酩酊状態に近かったのである。鼓膜がワンワンと鳴り視界は涙で歪み、ただこの嵐が通り過ぎるのを待って身を任せ心を閉ざしていた。

それ故、吐息や嬌声も止めようとしていなかったため、次第に熱を帯びてストロークの度に可愛い音色を奏でる

「ああッ・・・・あッ・・・・ッあッ・・・・あッ・・・・んッ・・・・あッ・・・・あッはァッ」

ミカサ自身いつしかその急速に広がる甘い弛緩に身を委ね、心さえも白く麻痺していった。

両親の記憶をリフレインし、もたげたオーガズムの心地よさが両親の記憶と重なる。

両親を惨殺した嗜虐者の強制的にもたらせる快感は皮肉にもその両親の記憶を美しく彩らせた。

その記憶にミカサは朦朧と呼びかける。

「お・・・・ぁさん・・・・お父さん・・・・あッ・・・・ンッ・・・・んグッ」

「ガッハッハッハ！　そう・・・・だッ・・・・俺がお前の新しい父だ！　俺色に染めてやるぞ！　俺無しに生きられないようにしてやる」

脂汗を垂らしながら実の娘と同じ年頃のミカサに腰を叩きつけながら。小太りの男がそう叫ぶ。

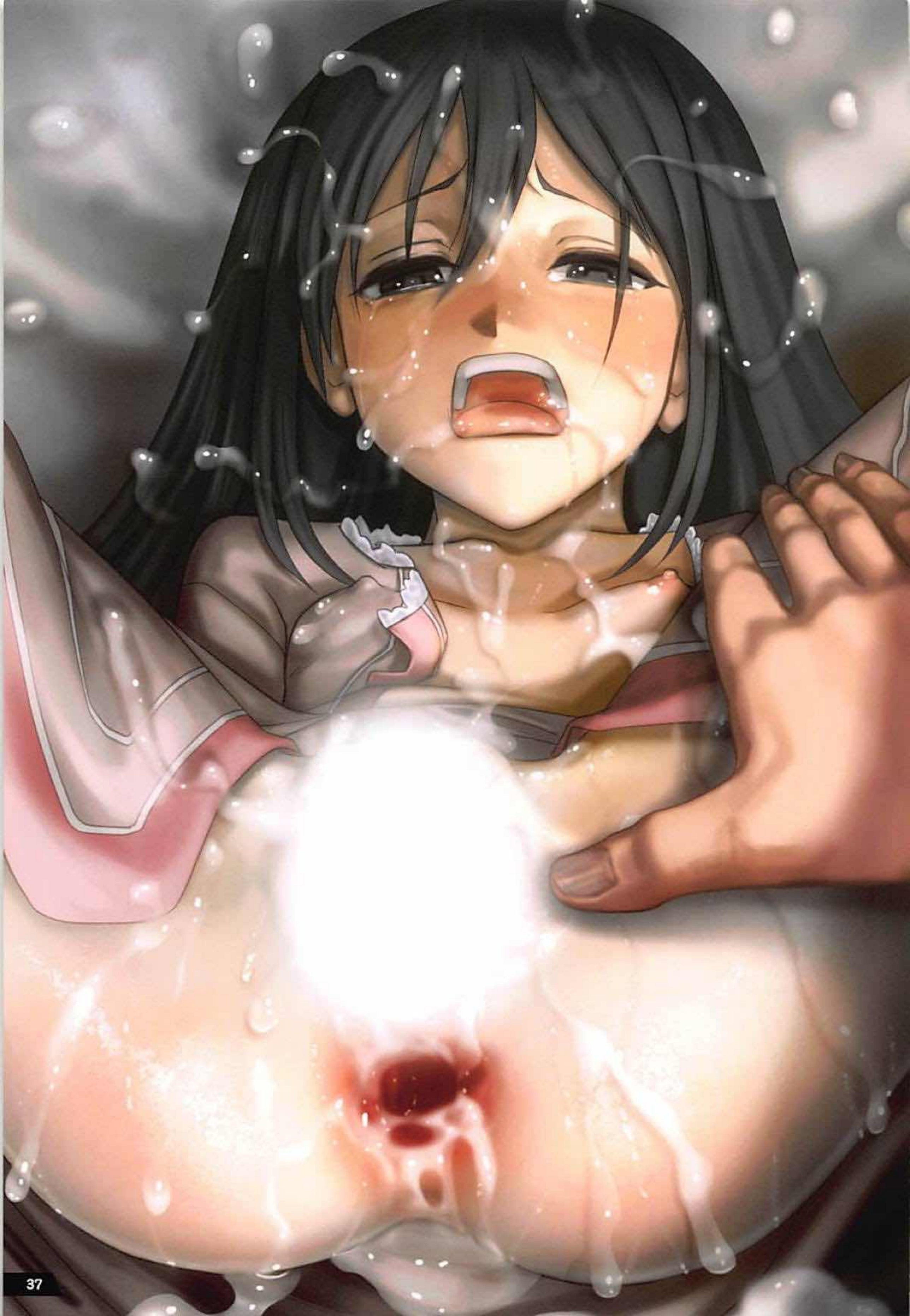
小さく細い膣は1ストロークごとに、しなやかに伸び広げられ、その都度深く押し込まれてこの年でありながら大人サイズのペニスを躰に収める能力が有るように受け入れていく。

その広げたられた粘膜をまとった膣壁が陰茎を強く絞り上げ締め付ける。まだ整っていない躰を無理やり押し広げることでしかありえないその禁断の収縮に男は歓喜の呻きを漏らす。

細膣の強烈な収縮でもたらす喜悦は彼を虜にしたようで、しゃにむに突き続けた。処女膜の破瓜の血がたたきつけられる破裂音とともに

――ブッチャッブッチャッヌッチャ――

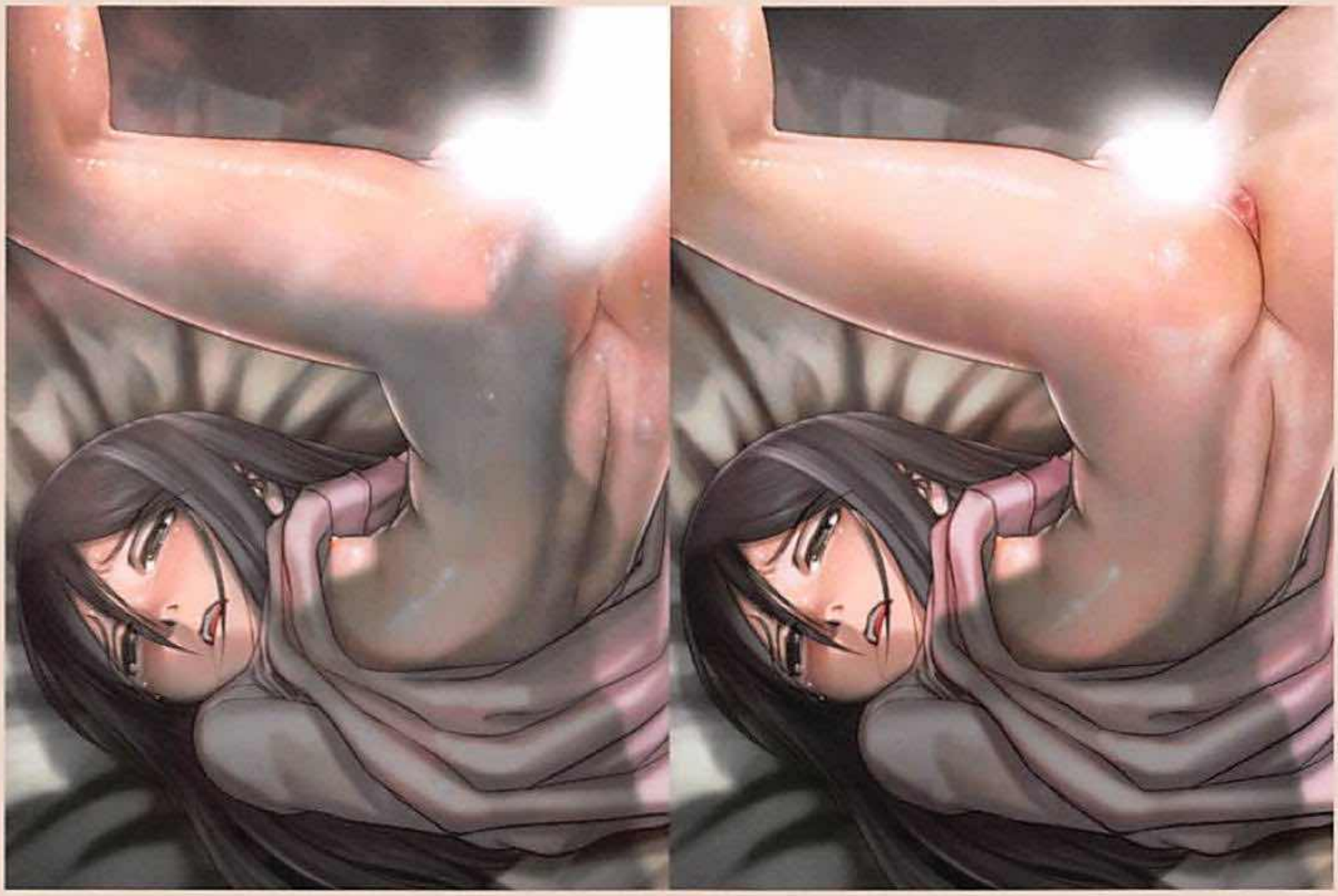
飛沫になって血の点描を下半身に色づかせた。

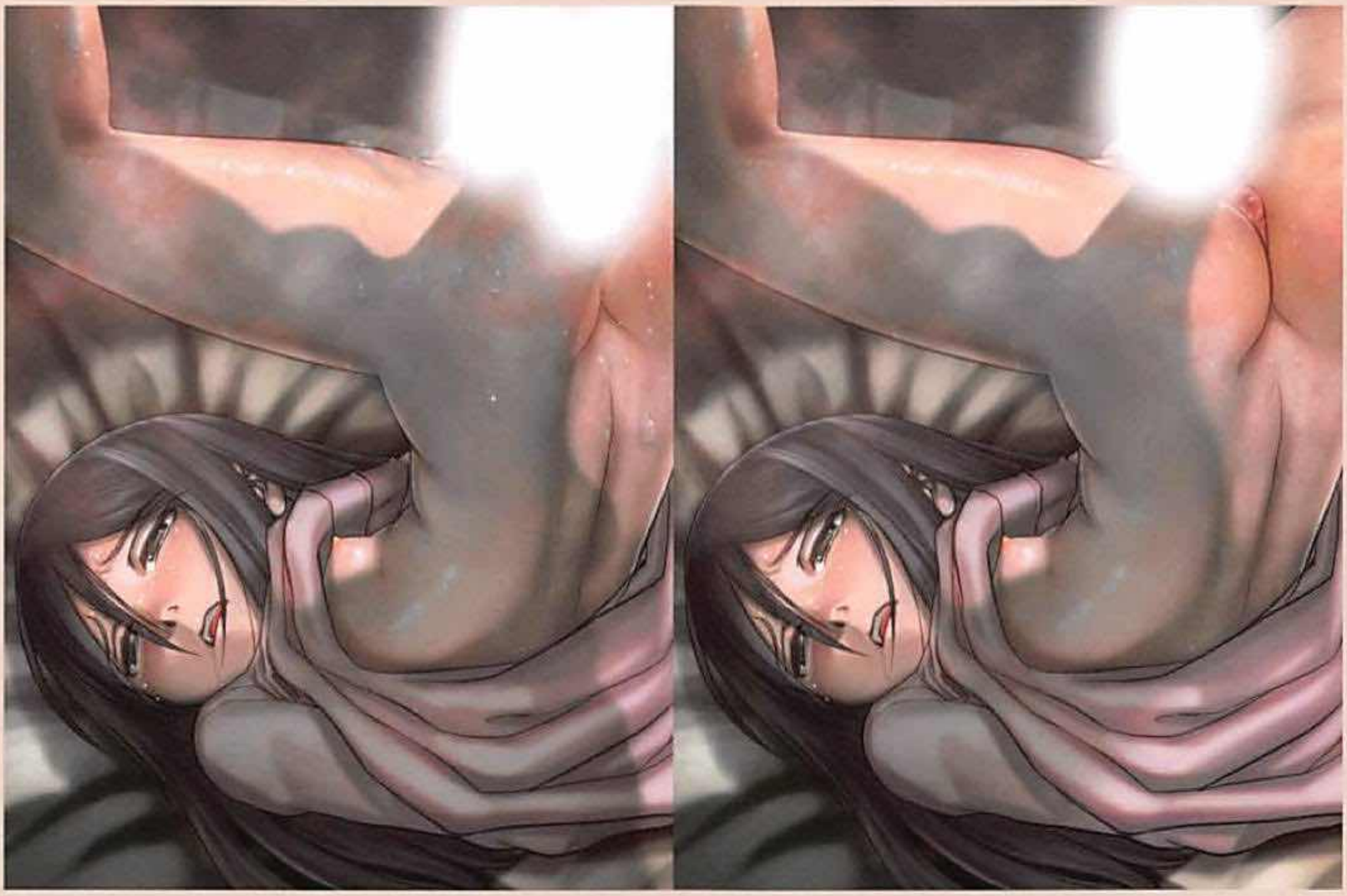


一突きごとにその衝撃で、アヌスから白濁した粘液が
――ブリュブリュブリュッ――
漏れ出る。
「折角入れてやったのに全部出す気かよ？」
痩せた男が漏れでた雫を亀頭に絡めとると戻すように半開きのアヌスに突き入れた。
「ファアアア！　アアァッ　ファアアア！」
表裏からサンドイッチにされてミカサは盛りのついた猫のような悲鳴を上げ続ける。
それは、内臓を直接陵辱される責め苦であり耐えようもなく断末魔に近かったのかもしれない。
その魂から出る叫びは3人目の男が陰茎を喉に差し込むことで止まった。
「ゲボッ　ゴフッ　ごォッッフッ」
三人の大人に同時に犯され、その体重であまりにも繊細なミカサの躰はベッドの中に沈み込み、押しつぶされるかのようにされて揉みくちゃにされた。
全身を嗜虐されながら膣腔から精液とは異なる白く濁った雫を落

【9】

とすまでになりその開花は嗜虐者を感嘆させた。
男の腰を叩きつけるリズムとミカサの心を高ぶらせる旋律は完全にシンクロして捕食者と被食者の4人は同時に意識を飛ばせた。
ドビュドビュドビュドビュルルルルルッ
射精とともにミカサは全身をバネのように弾かせてビクンッビクッビクッ　と痙攣し、意識は痺れて消えた。
まだ大人になっていない躰に注がれた子種、新たな生命の息吹をもたらす神聖なそれは両親を惨殺した者から吐き出された。その白い命のスープをミカサの小さな膣は、吸い取るように受け止めて満たした。躰の中に満ちていく。それは至福さえ感じさせるもので、ミカサはそれを両親の記憶と重ねながら反芻させていた。
「そんなに良かったか？　下の穴がまだ離さないぜ」
中年はミカサの真っ赤に充血して尖り続ける陰核をさすりながら、唇を奪った。
その後も三人の男は、腰を振るのに必死でミカサが失神していることにも気づかない。
失神していても内臓や舌は刺激で収縮や蠕動を続けており、髪を掴んでガクガクと頭を揺さぶって意識を失ったミカサの口腔内に注ぎ込んだ。





三人の男が散々に想いを遂げて息をついた時、ようやくミカサが気絶していることに気がついた。

「落ちグセがつき始めたな」痩せた中年男が頭をかく。

小太りが吠えた。

「てめぇラ俺の番くらい静かにしてろ！　ソラ起きろ、まだ始まったばっかりだろうが」

パシパシとミカサの頬を小太り男が叩く。

ミカサはその後しばらく意識を取り戻すことはなかったが、解禁された膣に三人の男が交代で精を放ち続けた。

何度も新たに大量のスペルマが繰り返し、これまでの子種を洗い流すように注ぎこまれ、その3人の男の精子がミカサの卵子に向かって戦い合っていた。

その勝者が、この捕食者と被食者の相反する遺伝子を受け持つ種を宿そうとしていた。

その後三人の男は休みを取り、アッカーマン家から略奪した様々な食料を飲み食った。

体温が急速に冷え、雨音とともにミカサは意識を取り戻した。

ミカサは静まり切った高揚と入れ替わるように冷たい現実が蘇りポロポロと涙を落とす。

「‥‥ウウッ‥‥」

「お、気がついたな。寂しいか？　忘れさせてやるぜ。これからは俺がお前の父親代わりだ。

買い手が出るまでの短い付き合い‥‥だがそれまでに俺たちの子を10人は産んでもらおうか。

クォーターなら金を産むガチョウになるには数がいるが、お前の歳ならそれを期待してるぜ」

「イヤァァァァァァァァァァ！」

叫んだミカサの喉に、アヌスに、そしてヴァギナ、同時に挿入されて宴は再開された。

ミカサは身も心も極限まで嗜虐され大人という巨人に食い散らかされ続ける。

それから数時間後、山小屋を訪れたエレンという少年に救い出されるその時まで‥‥。

その後、山小屋に訪れた少年エレンが捕まっているミカサを発見。エレンは手持ちのナイフで隙を狙って二人を倒したが、最期の一人にエレンは捕まってしまう。だがエレンに気を取られている間にミカサが最期の一人をエレンの落としたナイフで倒した。そう、仇を討つことが出来たのだ。

その後エレンとミカサの二人は救助隊に保護され、ミカサは治療の際、エレンの父であるグリシャ医師に避妊薬を処方されて子を宿すことはすんでの所で避ける事が出来た。両親を失ったミカサだったが、エレンの父であるグリシャのイェーガー家に引き取られることになった。

それからしばらくの年月がたち、ミカサはあの時の記憶を思い出すことがないまでに幸せな年月を過ごした。

グリシャ医師は彼女の身に PTSD（心理的外傷）が残らないか心配していた。というのは、少し考えを言葉にするのが苦手な所があったからだ。だがその心配は無用と判断された。

少年エレンに戦う覚悟を学んだミカサにとって、もうあの時の大人の男も、それどころか壁の外の巨人も怖いものではなかったのだ。

その2つは脅威として同義であり、駆逐すべき敵であり、それは戦う意志があればミカサの手でなぎ払えるものであると教わった。

事実、ミカサはエレンと、そして二人の共通の友人アルミンと三人で共に遊び過ごす。その年頃の彼らにふさわしい楽しい日々が続いた。

【エピローグ】

ミカサはそんなある日、エレンがアルミンと二人でコソコソと話をしているのを見つけた。

後をつけてみると、なにか本を熱心に見ていた。二人は楽しげに目を輝かせていたので、自分も入れてもらおうと声をかけようとした時、母親から食事を呼ばれる声を聞いて、二人は本を残して立ち去った。

何を見ていたのかとミカサが本をめくってみると、様々な写真と文字の中に折り目が付いているページが有り、開いてみると、男女の交わり。様々な体位について解説しているページだった。

――バン！――

ミカサは激しい勢いで本を閉じ、立ち上がった。

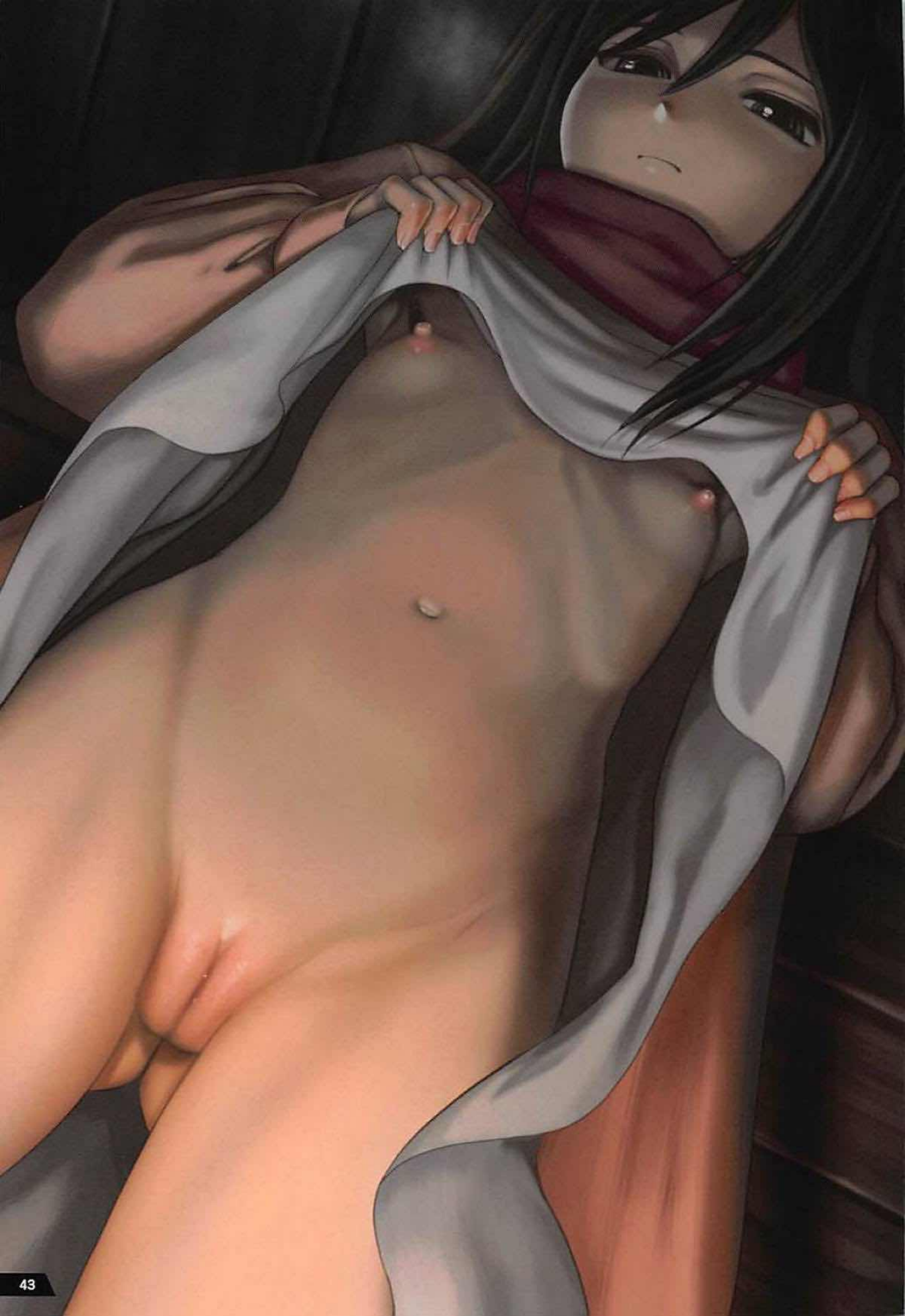
それから別の日、ミカサはエレンが一人の時を見計らって真剣な形相で呼んだ。

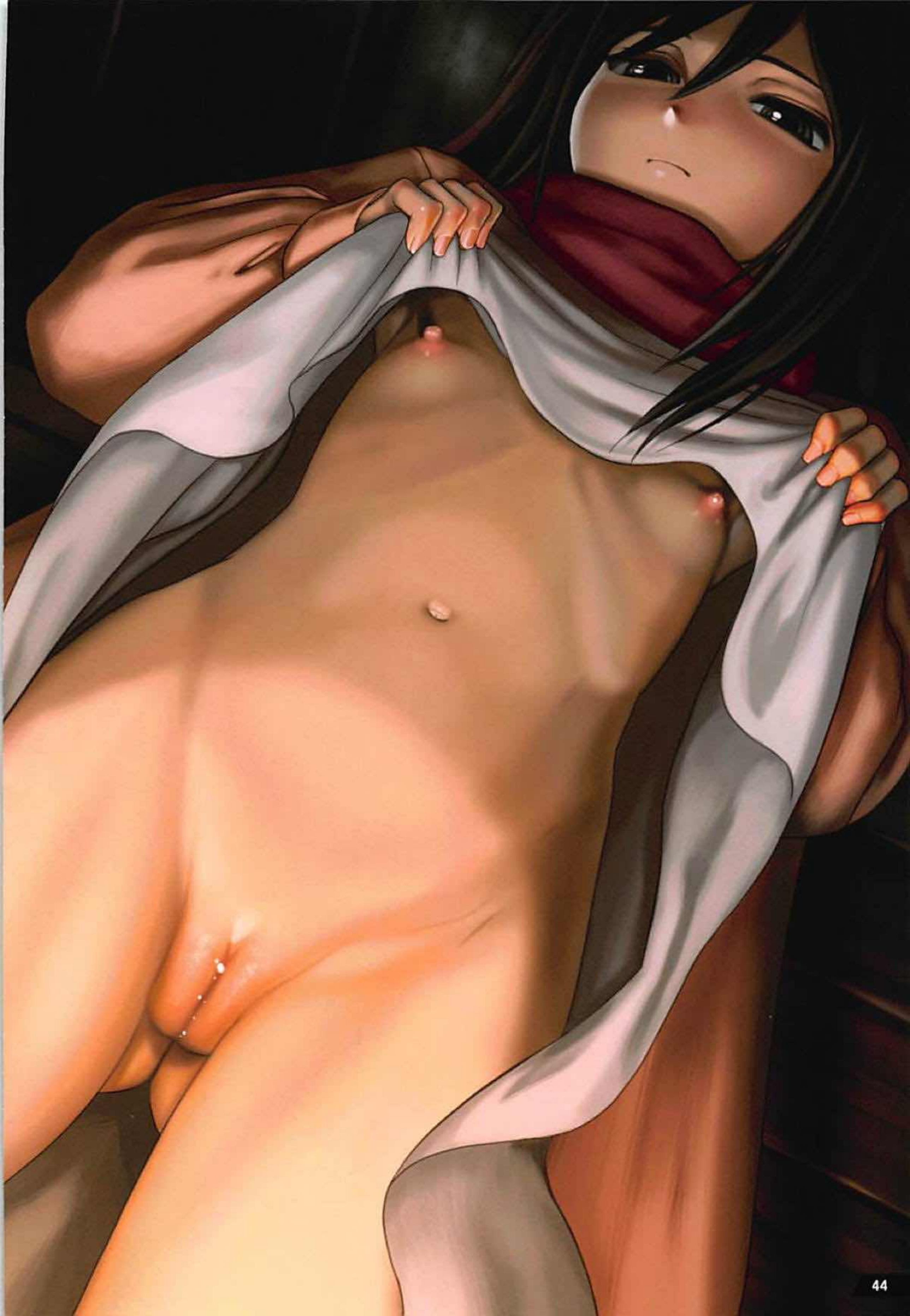
「エレン来て」

「え？」

「いいから」

エレンは有無をいわさず腕を捕まれ、ミカサの細腕からとは信じられない凄い腕力に引きずられて、エレンは物置小屋に連れ込まれ放り投げられた。





地面に投げ出されエレンは抗議した。
「痛ってえなぁ！　なにするんだよ」
だが見上げたエレンは息を呑む。ミカサはエレンを見下ろして仁王立ちになっていた。
「聞きたいことがある。アルミンと見ていた本、あれでエレンはどうする気？　まさか・・・したいの？」
「（壁の外に行きたいかってことか？）そりゃ・・・やってみたいさ。今の俺には力が足りないかもだけど」
倒れていたエレンのすぐそばにミカサに仁王立ちされ、エレンは立つスペースがなく腰掛けたまま答えた。
本を通して壁の外に素晴らしい世界があると知ったエレンとアルミンは、いつかその世界を探検すると約束していたのだ。
「どうやって！・・・誰と・・・するつもり？」
ミカサはさらに詰め寄るのでスカートの下が見えそうになる。
慌てて目を逸らしつつエレンは答えた。
「そ、そりゃみんなに反対されるだろうから、俺とアルミンで隠れて・・・することになるだろうな」
「ダメ！　それは人として・・・してはいけないこと」
ミカサはエレンは言えばわかってくれると信じていた。だが思いに反して、エレンは頑なだった。
「ミカサに指図されたくない。これはアルミンとの・・・男と男の夢だ！　約束だ！」
ミカサはエレンの瞳に強固な意思の光が宿っていることを見て取った。
こうなると何を言っても無駄なのがエレンだ。
ミカサはフゥ・・・と息をつき、少し躊躇したあと、何かの決意を固め、顔を赤らめて続けた。
「そう・・・エレン、私の話を聞いて」
「なんだよ」
「私、あの時エレンに助けられてとっても嬉しかった。エレンのおかげで今の私がある。エレンが私に道を示してくれた。でもそのエレンが間違った道を行くなら、私・・・私がそれを戻すのが、エレンへの恩返しだと思う」
「ちょっと待て、なんの話・・・」
「見て」
ミカサはワンピースのスカートを捲って見せた。スカートの下には、下も上も下着を一切つけておらず、真っ裸だった。
ワンピースの為、捲れば胸迄見える。
「おま！　ミカサ！　何やってんだ！」
「静かに・・・他の人に聞こえる」
「お・・・おう（ゴクリ）」
エレンは座ったまま硬直した。

ミカサの少し痩せた胸は胸郭の肋骨が浮き出ており、その上に小さな膨らみがあって、その頂きが桜色に震えていた。
胸の下の腹部は小さなおへそが見え、そこから下に目を移すと恥丘のスロープがやわらかな曲線を描き、その下に緋をさした真っ白なスリットも顕になっていた。

「エレンがどうしてもしたくなったら、私となら・・・・いい。・・・・アルミンは私とも大切な友達。・・・・でもダメ」
「なんでだよ！　アルミンは俺の大切な親友だ。ミカサならわかってくれるだろ？」
「エレン、・・・・私じゃ・・・・ダメ？　・・・・私はいつでも・・・・エレンの事考えてる。本当。エレンが望むのなら・・・・私となら、いつでもして・・・・いい。」
「だから、なんでその話をするのに裸見せんだよ！　普通に話せばいいだろ」

「目を背けないで！　私が本気だって・・・・わかってほしいから」
真っ赤になって顔を背けていたエレンだったがミカサの言葉に並々ならぬ真剣な意志を感じ、エレンは向き直した。
「・・・・ありがとう。本気だって証拠も・・・・ある。私、言葉が下手だから、うまく伝えられない・・・・だけど。
私の恥ずかしとこ・・・・濡れてるのわかる？」
「(なんかキラキラ光ってる)・・・・ああ」
「大切な人と・・・・一緒に・・・・したいって思うと・・・・こうなる。・・・・準備ができてるって事」

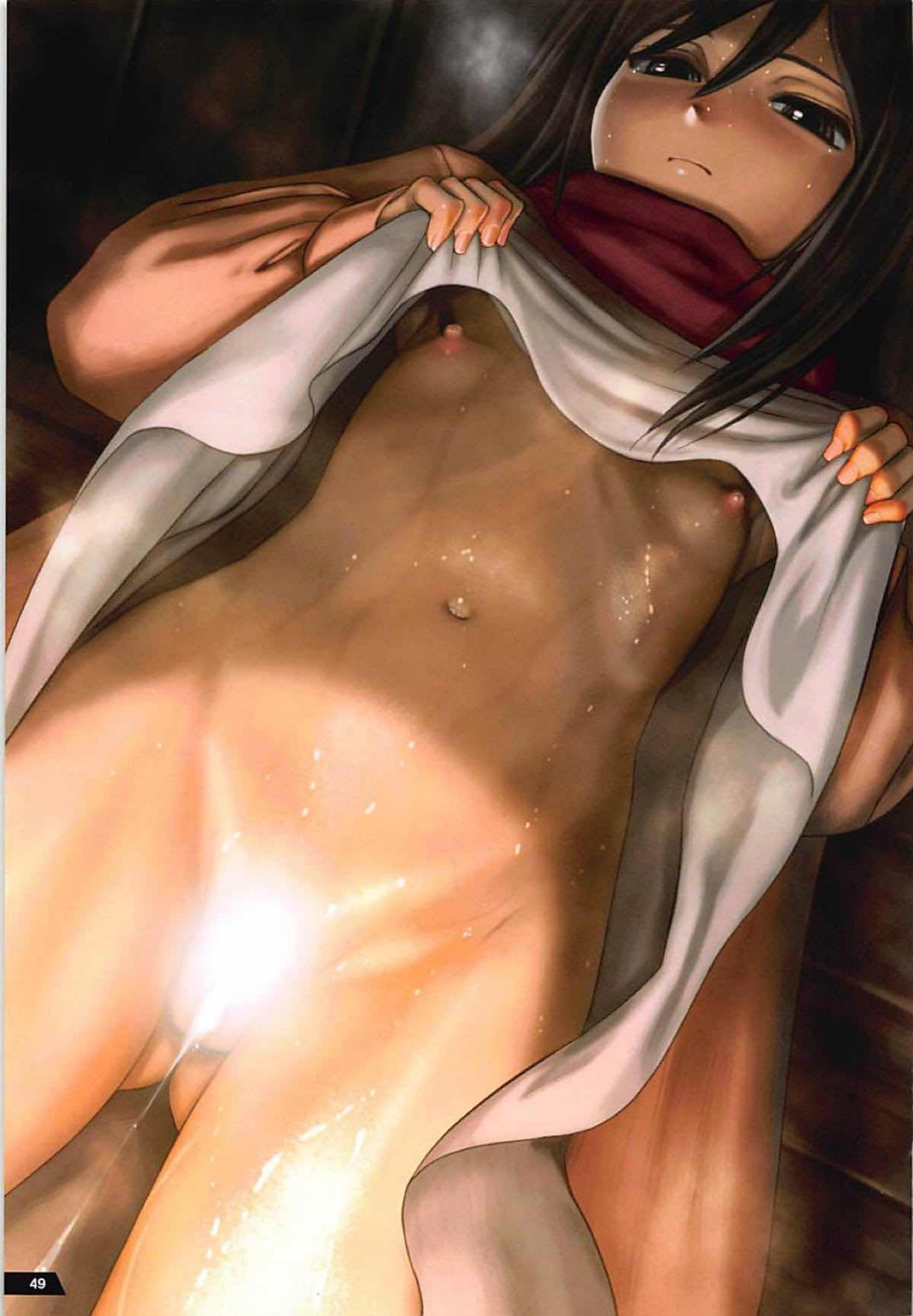
「そう・・・・なんだ。女って不思議だな」
「・・・・」
真っ赤になって二の句が告げなくなったミカサだったので、少し二人の間に沈黙が流れたが、エレンは大きな笑みを浮かべて白い歯を見せた。
「でも言いたいことは分かった。それだけミカサは本気だってことだな」
「うん。だから・・・・私はエレンとだったら・・・・いつでも・・・・できる。信じてくれた？」

「別に・・・・俺はミカサとがダメだなんて言ってないだろ？」
「本当に！」
「ああ」
「それじゃ・・・・アルミンとのことは諦めてくれる？」
「そうじゃなくてさ、俺とミカサとアルミン、の三人ですればいいだろ？」
「え・・・・」

「3人ならいいぜ。ミカサはどうだ？　アルミンのこと嫌いか？」
「嫌いじゃない・・・・じゃないけど・・・・エレンはそれがいいの？　三人がいいの？」
「おお！　それでいい。三人で夢を叶えようぜ！」
「・・・・わかった。エレンの言うとおりにする」

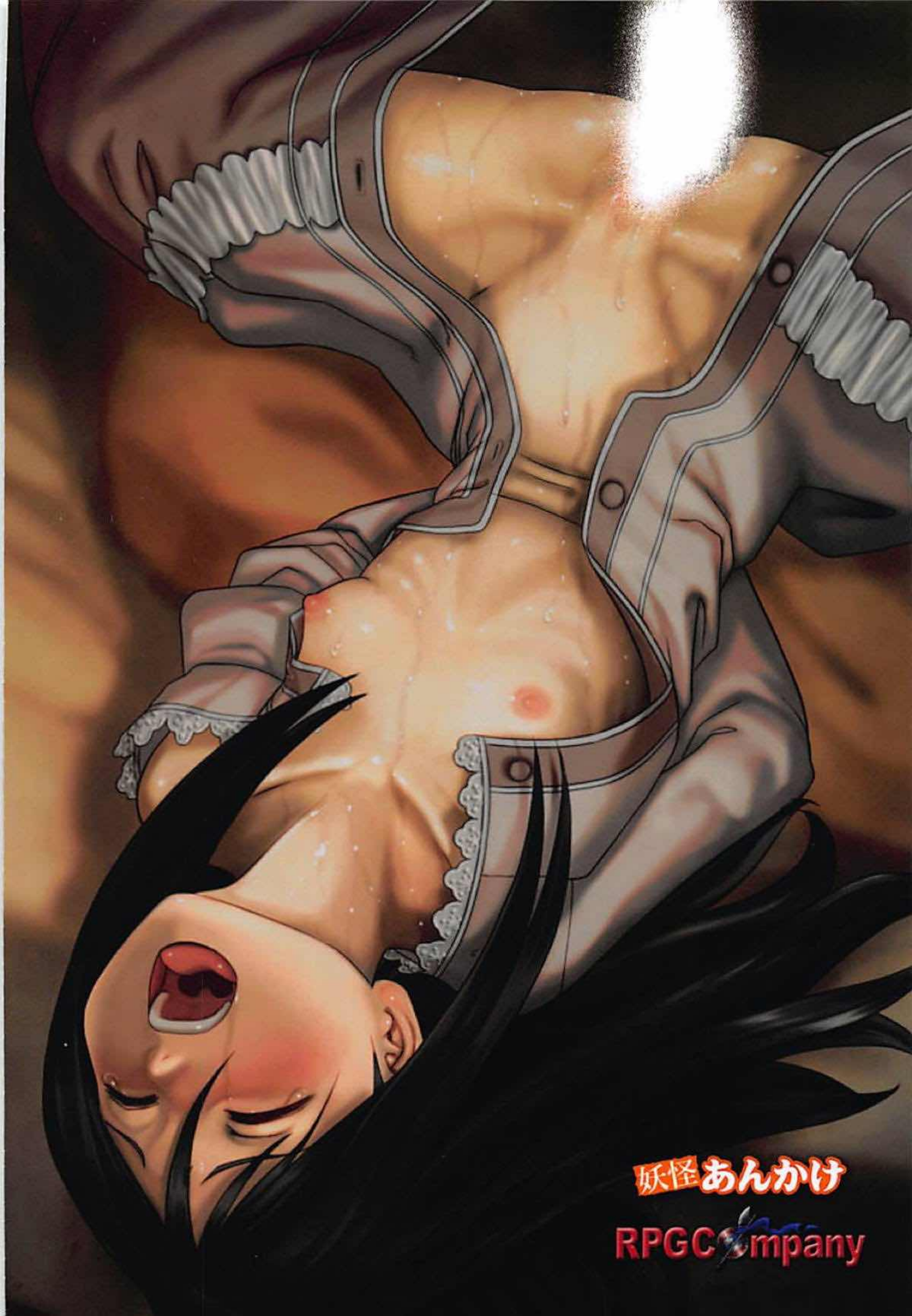
ミカサはスカートを離した。
スカートで裸体が隠れてようやくエレンは大きく息を吐いた。
「・・・わかってくれたか。どうなることかと思ったぜ。」
「じゃぁ、今は・・・・その・・・・しなくていい・・・・のね？」
「まだ俺達には早いだろ。もう少し大人になってからで十分だ。そのためには十分に鍛えてその日に備えなきゃな」
「・・・・うん」
「それじゃその日が来るまで、三人の内緒だ」
「わかった。いつまでも・・・・待ってる」
「おう！」
その時、ドアが開いて母親が顔をのぞかせた。
「エレン、ミカサ。もうすぐご飯だよ！　あれだけ呼んだのにいないと思ったらこんな所に。何か探してるの？」
ミカサは顔を真赤にして、しかし顔をほころばせながら言った。
「ううん。大切な話・・・・してたの。でももう大丈夫」
「そう、なら良かった。今日は美味しい川魚のシチューだよ」
「はい。エレン、それじゃ行こう」
ミカサはエレンに手を伸ばす。
「俺は後でいいよ」
「どうして？」
「足がしびれちゃってさ。」
「そう？　じゃあ待ってる」
「いいから。母さんを手伝ってやってくれ」
「わかった」
二人が立ち去ってから、エレンはクタクタとその場に倒れ込んだ。
エレンの股間にはテントが張り、それがどうすれば収まるのかエレンはその後30分以上悩むことになる。
・・・・それはともかく・・・・
――それからミカサはずっと、3人で夢をかなえる「その日」が来るのを待っている。

END



■制作　妖怪あんかけ
■編集&発行　2015年12月　RPGカンパニー2
■誌名　巨人の供物達 ミカサ編
■URL　http://www.rpgcompany.com/
■pixiv　http://pixiv.me/dun
■twitter　https://twitter.com/dungeonn
■E-mail　dungeon@rpgcompany.com
■印刷所　グラフィック

禁無断転載！
WEBサイト等への無断アップロードも禁止
発見した場合は法律により罰します


妖怪あんかけ
RPGCompany